

山形県北東部における縄文時代中期の遺跡動態

—西海渕遺跡と西ノ前遺跡を中心として—

小林圭一

1 はじめに

縄文時代中期は、各地で大規模な集落が形成され、遺跡数もピークを迎える人口が増大するなど、縄文時代を通して最も安定し、繁栄を極めた時期と評価されている。その年代は、今から5,000～4,000年前の約1,000年間に相当するとされてきたが、近年の炭素14年代法を用いた年代測定研究では、較正年代が5,415～4,490年前(3,465～2,540calBC)と推定され、従来の年代観より400～500年遡ると共に、925年間の年代幅が指摘されている(小林謙一2017)。東北地方の縄文時代では、前期から中期にかけて北緯40°のラインを境に東北北部に「円筒式土器分布圏」、東北中・南部に「大木式土器分布圏」が形成され、南北の地域差が顕在化したが、中期後半には東北北部にも大木式土器圏の影響が漸次浸透し、円筒式土器圏の独自色が希薄化した経過が観察される。

山形県内の内陸部ではこの時期、舟形町西ノ前遺跡出土の土偶(図12)に象徴される立像土偶が多数製作され、土偶祭式の盛行した様相が窺われる。また村山市^{さといいぶち}西海渕遺跡では大型住居跡を放射状に配置し、中央に共同墓地を持った大規模な環状集落(図3)が営まれており、大木式土器分布圏の中でも当該域に有力な地域圏が形成されていたことは確実である。しかし中期を通して安定した生活が営まれたのではなく、一時的な衰退といった消長を経て中期末葉に至っており、中期の中に転換期の存したことが推定される。

本論では、山形県北東部の縄文時代中期の遺跡分布と年代的推移を検討し、「西ノ前型^{タイプ}土偶」を共有した地域社会の様相を考察する。当該域を代表する西海渕遺跡と西ノ前遺跡の集落構成から拠点集落の在り方を検討し、さらにその周辺の遺跡分布から往時の生活領域を推定することで、当該域の中期社会にどのような特質が指摘できるのか考えてみたい。なお本論は、2018年8月

4日舟形町にて筆者が行った口頭発表「最上川水系と最上南部地域の縄文文化—西海渕遺跡と西ノ前遺跡を中心として—」をもとに、起稿したものである。

2 山形県北東部の地理的様相

奥羽脊梁山脈の西側に位置する山形県は、南北方向の2列の山並み(脊梁山脈・出羽山地)と2列の平坦地(内陸盆地群・庄内平野)で構成されており、吾妻連峰に源を発する最上川が北流し、米沢盆地→長井盆地→山形盆地→尾花沢盆地→新庄盆地を数珠状につないで庄内平野に至り、日本海へと流入する。盆地間の最上川は峡谷状を呈することが多く、介在した狭窄部や遷急点がそれぞれの地域を画している。

本論で対象とした山形県北東部は、最上地方(新庄市・



図1 山形県北東部の地形区分

金山町・最上町・舟形町・真室川町・大蔵村・鮭川村・戸沢村) と村山地方北部の北村山地区(尾花沢市・大石田町・村山市)の一部) が該当し、最上川中流域でも下流に位置した地域を指す。平地としては新庄盆地、向町盆地、尾花沢盆地が存しており、段丘地形の発達に特徴付けられ、冬季の降雪に関しては国内有数の豪雪地帯に数えられている。両地域は行政上異なった区域に扱われるが、地勢的に結び付きが強く、東根市を含めて「最北地区」と総称されることもある。図1が本論で取り上げた山形県北東部の範囲であるが、最上地方の西側と北端が図郭外となっており、戸沢村全域と鮭川村・大蔵村の西側、金山町・真室川町の北側の遺跡は対象外となる。

新庄盆地 新庄盆地は内陸盆地群の一つで、最上地方の中心に位置する。東は神室山地、北は丁岳山地、西は出羽山地に囲まれ、南は猿羽根山丘陵で尾花沢盆地と画される。盆地の南西部の一角を最上川本流が穿入蛇行し、これに向かって東から小国川、北から鮭川、南から銅山川等が合流する。盆地の内部には標高100~200mの丘陵が発達しており、これ等によってさらに狭義の新庄盆地をはじめ、金山盆地、舟形盆地、鮭川盆地の小盆地に区分される(図1)。

狭義の新庄盆地は、泉田川扇状地を中心に、指首野川、戸前川、新田川の流域からなり、ほぼ新庄市域に含まれる。東西幅約14km、南北幅約15kmの西方に開いた扇形を呈し、盆地内部に西山丘陵・福田山丘陵等の低起伏の丘陵が存し、北側は東西に張り出した上台丘陵を介して金山盆地に接し、南側は新田川と小国川に挟まれた南山丘陵を介して舟形盆地に接する。盆地の中心を占める泉田川扇状地は、開析が進み低位段丘と化しており、沖積低地は現河川に沿ってのみ分布する。

向町盆地 向町盆地は最上地方の東部に位置する奥羽脊梁山脈中の小盆地で、行政区域では最上町が該当する。同盆地は最上川支流の小国川に沿って細長く形成され、東西幅は約11kmを測る。隣接の鳴子や鬼首と同様にカルデラ(直径10~13kmの楕円形)として生成し、周囲は800~1,300m級の急峻な山々に囲まれるが、その内側は緩やかな丘陵地で占められている。小国川は盆地底を南と北から流下した支流を肋骨状に合わせながら西流するが、小国川右岸と北部の支流沿いには、扇状地を開析した平坦な低位段丘が発達し、特に白川と絹出川

に沿って顕著に認められる。また盆地南部には、起伏が大きく開析が進んだ火碎流台地が展開する。

盆地東端の神明川に沿って遡ると、脊梁山脈を横切る標高350mの境田越に至り、宮城県内の江合川(荒雄川)水系に連絡する。勾配が緩く、古くより太平洋方面との交通の要衝となっており、現在国道47号線やJR陸羽東線がトンネルのない状態で県境を並走する。東方の標高が低いため、太平洋側からの気流が比較的流入しやすく、夏季には冷涼なヤマセの影響を受けやすい環境もある。

小国川は向町盆地を抜けると峡谷を穿って約6km西流し、小盆地である舟形盆地へ流入する。小国川に沿った同盆地は、東西幅約12km、南北幅1~2kmと細長く、両岸には高位・中位・低位段丘が模式的に分布しており、西ノ前遺跡は小国川に向かって張り出した低位段丘面に立地する。

尾花沢盆地 尾花沢盆地は新庄盆地と山形盆地に挟まれた内陸盆地群の一つで、村山地方の北部に位置し、行政区域では尾花沢市と大石田町、村山市の北部が該当する。東方を奥羽脊梁山脈、西方を出羽山地に挟まれ、北縁は猿羽根山丘陵、南縁は河島山丘陵で画される。尾花沢盆地には段丘地形が顕著に発達しており、上位から猿羽根山Ⅰ面、猿羽根山Ⅱ面、尾花沢Ⅰ面、尾花沢Ⅱ面の4段の段丘面に区分され、縄文時代の遺跡の多くは最も広く分布する尾花沢Ⅰ面(中位段丘)に立地する。盆地は東西に二分され、盆地東部は御所山(船形山)から流下した丹生川に沿う段丘・低地、盆地西部は最上川に沿う南北に伸びた段丘・低地によって占められるが、主部である前者は南東-北西に方向性の構造を持ち、丹生川左岸に中位段丘面が発達する。また西海渕遺跡は後者の最上川左岸に位置する。

盆地東縁の母袋橋で丹生川に合流する支流(母袋川)を6km程遡ると、標高520mの鍋越峠に至る。現在国道347号線が通り、宮城県内の鳴瀬川水系に連絡するが、古代より陸奥と出羽を結ぶ主要な交通路で、最上川水運が盛行した近世~近代には、河港大石田から宮城県の大崎平野への経路となっていた。

3 山形県内の縄文中期遺跡の概要

図2には、菅原哲文氏の研究(菅原2013・2014・

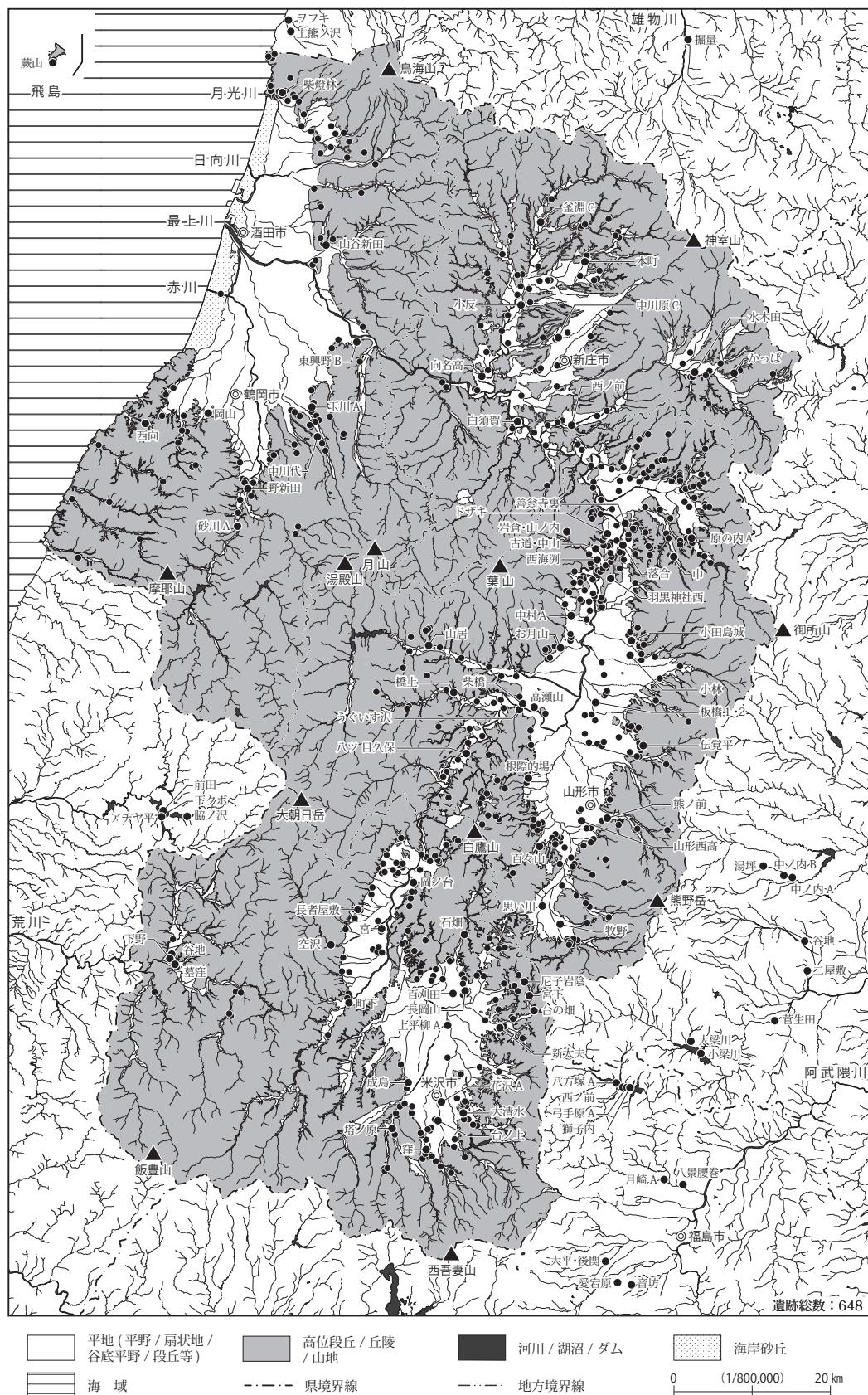


図2 山形県内の縄文時代中期の遺跡分布

2017)に基づいて、山形県内の縄文時代中期の648遺跡をプロットした。中期初頭大木7a式期の遺跡はあまり明確でないが、遺跡数の大幅な増加と立地の拡大、大

規模遺跡の形成は、大木7b式期（厳密には大木7a新式・竹ノ下式並行期）以降に顕在化している（註1）。

日本海沿岸域の庄内地方の中期前葉は前期末葉の延長

線上にあり、北陸の新保式土器が主体を占め、大木7a・7b式土器は客体的でしかない。また円筒上層a・b式土器も少ないながら出土している。後続の大木8a・8b式期は大木式土器分布圏に組み込まれるようになるが、こやまざき小山崎遺跡群 (さいとうばやし柴燈林遺跡) で少量の馬高式土器が伴出している。県北の最上地方は大木式土器分布圏にあるが、中期前葉では水木田遺跡で円筒上層b式と北陸系土器、西ノ前遺跡でも北陸系土器が出土している。また大木7b~8a式期の該域は、「西ノ前^{タイプ}土偶」の主体的な分布域となっており、大木式土器分布圏の中でも有力な地域圏が形成されていたと推定される(図15)。

最上川中流域の村山地方も大木式土器の安定した分布圏となっており、北部の尾花沢盆地の原の内A遺跡で搬入品と見られる馬高式土器、落合遺跡で円筒上層e式に類似した土器が出土している。最上川上流域の置賜地方は台ノ上遺跡に代表されるように、中期前葉では大木式土器の主体的分布圏に含まれるもの、北陸系土器が一定量を占め、関東系土器も散見される。中葉では安定した大木式土器分布圏となるが、関東や他地域の影響が想定される土器も出土しており、東北南部との接触地域としての様相を示しており、三脚石器や三脚土製品を多出する地域として特筆される(図15)。また新潟県側に流下する荒川水系の小国盆地では、中期前葉は新保・新崎式系の土器が主体を占め、大木式は客体的な在り方となっており、大木8a式期では大木式が主体となり、馬高式土器も少量出土している(菅原2018:197頁)。

山形県内の縄文遺跡は、最上川水系として一緒に扱われる傾向にあるが、中期前葉では北陸方面の影響を強く受けた庄内地方と置賜地方の小国盆地、大木式土器の主体的分布圏である村山地方、大木式が主体ながら北陸と関東方面の関係が窺われる置賜地方、円筒上層式との関連が窺われる最上地方と、地域的差異が顕在化する。中期中葉大木8a・8b式期になると遺跡数はピークを迎える、県内一円が大木式土器の主体的分布圏となり、表面上地域差は解消に向かうことになるが、集落・住居構造や土器、土製品、石製品等には細かな差異が認められる。

中期後葉大木9・10式期になると、遺跡数はやや減少する。長方形大型住居を主体とした環状の集落構成は姿を消し、円形を基調とした住居の小型化と規格化が進行し、複式炉が盛行する。県内の遺跡で大木10式期か

ら後期初頭への集落の変遷が辿れる遺跡は非常に少なく、大木10式で途絶えた遺跡が多く見られる。後期まで存続した遺跡でも、後期の土器が出土する程度で、住居が検出され集落としての継続性が確認された遺跡は稀で、中期末葉に席捲した複式炉の廃絶と相まって、大きな画期が想定される。

4 西海渕遺跡の集落構成と領域

(1) 西海渕遺跡の集落構成

西海渕遺跡は、尾花沢盆地の南西端の富並川左岸の河成段丘に立地する(図5)。最上川との合流点から1.8km遡った地点で、発掘調査は圃場整備事業に伴って山形県教育委員会により、1990年(第1次調査)と1991年(第2次調査)の2ヶ年にわたり実施された(阿部・黒坂1991、阿部・黒坂1992)。大木8b式を主体とした大規模な集落で、長方形大型住居を集落構成の基本として放射状に配列され、遺構が希薄な広場を中心として墓壙群→土坑群→大型住居群の4重の同心円で構成される(図3)。環状集落の形成は、一部に散見される大木8a式期の土坑を除けば、大木8b古式期に長方形大型住居の構築に始まり、大木8b新式期の円形・楕円形竪穴住居の構築を経て、集落構造に働いていた規制が崩れ始める大木9古式期に終焉を迎える。環状集落として最も完成された構成を示すのは最初期の大木8b古式の段階で、大規模な集落として多くの構成員を擁していたことが想定される。

集落は一部未調査区域を残すものの、その広がりは直径約120mの環状を呈し、中央部の直径15~17mの範囲には、遺構密度の希薄な区域が存する。その外側の内径15~17m、外径30~35mの範囲には、約150基の墓壙がほぼ環状に集中する。墓壙群の外環部から幅10~15m付近には、土坑の夥しい集中が認められる。更に集落空間の外周に当たる内径約80m、外径約120mの環状の範囲には、50棟以上の住居跡が集中的に分布している。その構成の主体は大型竪穴住居であり、長軸10~15m、幅3.5~4mの長方形ないしは楕円形の長大な平面形が通例で、少なくとも26棟が確認できる。これらの住居は、掘り込みは浅く、主柱は住居長軸線を挟んで2本1対で5対程度が等間隔に配列され、長軸線上の床面に地床炉が複数(3~4基)配置される。



図3 村山市西海渕遺跡の集落構成

個々のプラン上での建て替えは頻繁に認められるが、大型住居同士の重複は稀で、住居長軸線が放射状に配列されている。またこの区域には、直径6～7mの円形また

は楕円形プランの竪穴住居が、少なくとも20棟が検出されている。多くは壁柱穴と周溝を構造上の特徴とし、主柱穴は4～5基程度で、床面の隅に寄って長径1.2～

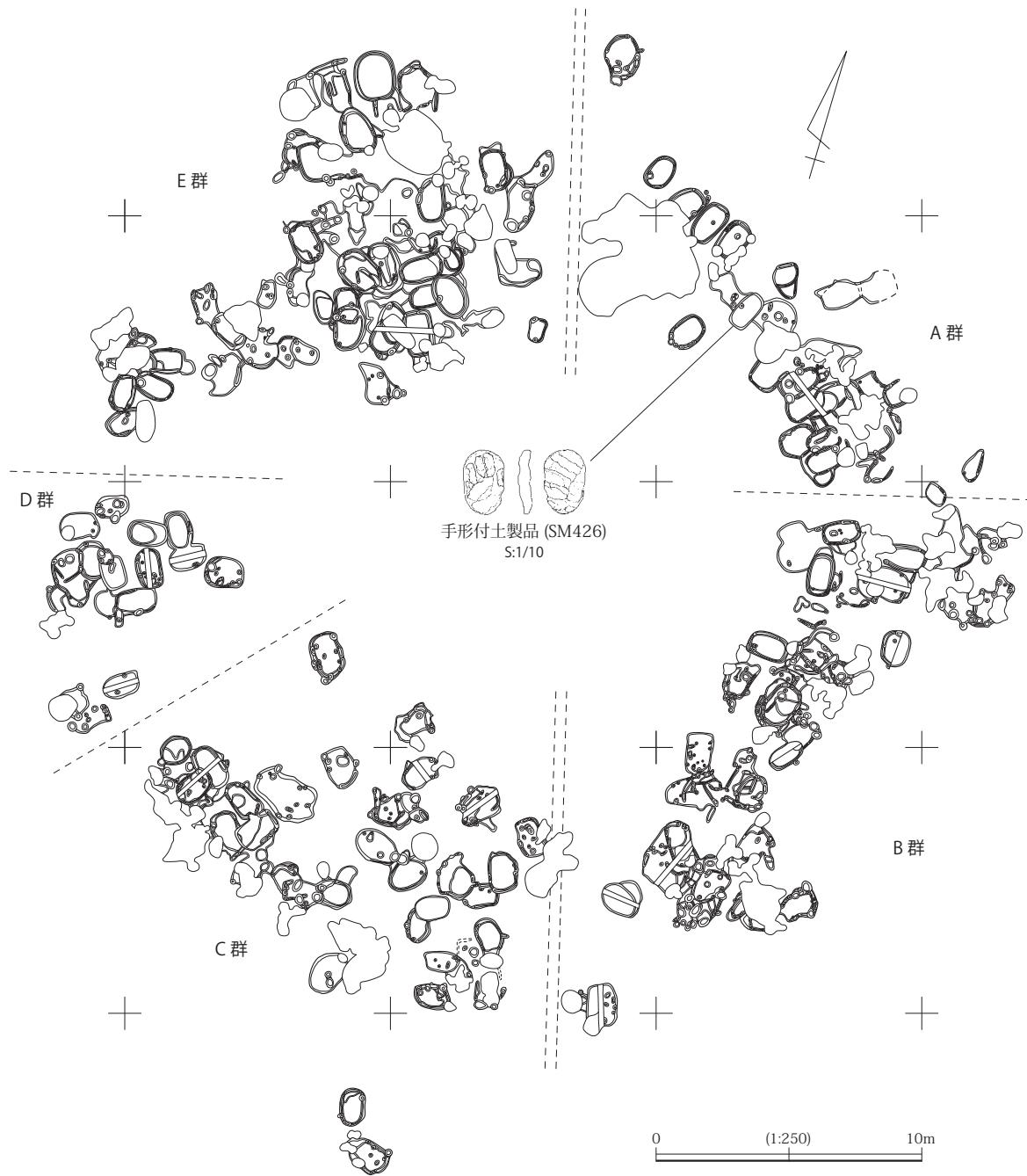


図4 村山市西海渕遺跡の墓壙群

2m、短径1～1.5mの石圓炉を持つ。円形住居の多くは長方形大型住居を切って構築されており、出土土器も大木8b新式～9古式が主体となる。

西海渕遺跡で検出された墓壙（図4）は、長径1.5～1.8m、短径1m程度の楕円形あるいは小判形の平面形を呈しており、底面は平坦に作出され、底面の周囲には幅10～20cmの溝を巡らせた例が多く見られる。検出面からの掘り込みは一般的に浅く、遺物の出土は稀であるが、SM426から手形付土製品が出土している。墓壙

同土は重複が著しく、正確な数量をカウントすることは困難であるが、分布状況から5～7単位の小群に分割される。即ち東群と西群に大きく二分され、さらに東群は2単位の小群（A・B群）、西群は3単位の小群（C・D・E群）に区分することが可能であろう。A群は25基以上、B群は30基以上、C群は32基以上、D群は16基以上、E群は39基以上で、墓壙の合計は142基以上となり、東群は55基以上、西群は87基以上と不均衡が生じている。

表1 山形県北東部の縄文時代中期の主要遺跡

No.	遺跡名	所在地	立地	地形区分	大木7a式	大木7b式	大木8a式	大木8b式	大木9式	大木10式	備考
1	本町遺跡	金山町	段丘低位面	金山盆地(金山川)	○	○	◎	◎	○		1980年調査/堅穴住居13(中期中葉)・石棒祭祀遺構?/土偶・石棒/町報告/もとまち)
2	下野明遺跡	金山町	段丘低位面	金山盆地(上台川)		○	○			○	1958年調査/土偶2/金山町史/(しものみょう)
3	片杉野遺跡	真室川町	段丘低位面	金山盆地(金山川)					○	○	1958年調査/複式炉/真室川町史
4	小反遺跡	鮭川村	段丘低位面	鮭川盆地(最上内川)			○		◎	◎	2004年調査/住居14(大木9新~10古式)・掘立建物1/県埋文148集/(こぞり)
5	上大淵遺跡	鮭川村	段丘低位面	鮭川盆地		○	○	○	○		詳細不明/大型石棒/鮭川村史
6	中川原C遺跡	新庄市	段丘中位面	新庄盆地(泉田川)		◎	◎	○			1999・2000年調査/建物跡22・埋設土器・大規模捨場/土偶41点/県埋文98集
7	立泉川遺跡	新庄市	段丘中位面	新庄盆地(泉田川)						◎	1998年調査/捨場のみ/大木10古式~後期初頭(刺突文土器)/土偶4/県埋文98集
8	白須賀遺跡	大蔵村	段丘中位面	銅山川河口			○	◎	◎	◎	1954年調査/注口土器(8式県文化財)・土偶脚部・足形付土製品/山形県史考古資料・大蔵村史通史編/(しらすか)
9	西ノ前遺跡	舟形町	段丘低位面	舟形盆地(小国川)	○	◎	◎	◎			1992年調査/堅穴住居9(8a式7、8b式1)・大規模捨場/土偶46(国宝)・新崎式土器/県埋文1集
10	水木田遺跡	最上町	段丘低位面(自然堤防)	向町盆地(小国川)	○	○	○				1978年調査/堅穴住居8(7b式1、8a式6)・大規模捨場/完形土器多数(国重文)・土偶17・円筒上層b式・新崎式土器/県75集
11	熊の前遺跡	最上町	段丘低位面(自然堤防)	向町盆地(小国川)		○	◎	○			1977年調査/堅穴住居3(8a式)・石棒/県34集/(くまのまえ)
12	げんだい遺跡	最上町	段丘低位面	向町盆地(白川)						○	1987年調査/埋設土器/県128集
13	水上遺跡	最上町	段丘低位面(自然堤防)	向町盆地(綱出川)			○	○	◎	○	1976・80・2010年調査/堅穴住居1(9式)・後期前葉主体/県27・40・215集/(みずかみ)
14	かっぱ遺跡	最上町	段丘低位面	向町盆地(鳥出川)			◎				2000年調査/旧河道から出土/県埋文114集
15	原の内A遺跡	尾花沢市	段丘中位面	尾花沢盆地(丹生川)		◎	◎	◎			1980・82・87年調査/堅穴住居16・埋設土器/土偶40・馬高式土器/県36・71・132集
16	オトリ沢A遺跡	尾花沢市	山間河谷(山麓~低地)	尾花沢盆地(牛房野川)			○	○			別称牛房野遺跡/詳細不明/村山市史別巻
17	巾遺跡	尾花沢市	谷底平野	臘気川		○	◎	○	○		1982・83年調査/埋設土器/8a式主体・土偶/市3・4集/(はば)
18	善翁寺裏遺跡	大石田町	丘陵裾部	尾花沢盆地(五十沢川)			○	○	○	○	1993年調査/詳細不明/大珠3?/町6集
19	落合遺跡	村山市	段丘低位面	尾花沢盆地(最上川)	◎	◎	○	◎	◎		1995年調査堅穴住居6/土偶・石棒・円筒上層e式/県埋文36集・村山市史別巻
20	羽黒神社西遺跡	村山市	丘陵地	河島山丘陵			○	○			2014・15年調査/大型建物跡1(8b式)・石囲炉・フラスコ状土坑・大規模捨場/土偶11・唐草文系土器
21	来迎寺遺跡	大石田町	段丘中位面	尾花沢盆地(最上川)		◎	◎	○	○	○	1979年調査/堅穴住居1・埋設土器(7b~8a式)/青竜刀形石器/県34集・大石田町史上巻・さあべい2-4/(らいこうじ)
22	笛山遺跡	大石田町	段丘中位面	尾花沢盆地(最上川)	○	○	○	○			別称小野原遺跡/1970年調査/堅穴住居(8b式)/大石田町史上巻
23	ドザキ遺跡	大石田町	段丘中位面	尾花沢盆地(最上川)			○	○	○		1995年調査/大型建物跡2/土偶4/町8集
24	久伝遺跡	大石田町	段丘中位面	尾花沢盆地(最上川)	○	○	○	○			1974年調査/土坑(8b式)/土偶/県9集/(きゅうでん)
25	西海渕遺跡	村山市	段丘中位面	富並川			○	○	◎	◎	1990・91年調査/大型建物跡26(8b式)・堅穴住居20(8b~9式)・墓壙群/土偶・石棒・手形付土製品/県164・174集/(さいかいぶち)
26	古道遺跡	村山市	丘陵裾部	富並川			○	○	○		1974年調査/堅穴住居10(8b式)/土偶2/県9集/(ふるみち)
27	中山遺跡	村山市	丘陵裾部	富並川		○	○	○	○	○	1974年調査/堅穴住居4(9式)/県9集・村山市史別巻
28	岩倉遺跡	村山市	山間河谷	富並川水系(大高根川)		○	○	○	○		別称小高根遺跡/村山市史別巻・さあべい2-4
29	山ノ内遺跡	村山市	山間河谷	富並川水系(大高根川)						◎	別称ガンジャ遺跡/村山市史別巻

◎:遺物・遺構多数報告、○:遺物・遺構報告 (菅原2014・2017)を参照

西海渕遺跡の墓壙の長軸方向に対する一定の規則性が弱く、放射状に並んだり円周方向を向いたものが混在するが、SM426を含むA群では、長軸方向に求心性をもって放射状に並ぶ例が多く認められる。長期にわたって一定の場所に埋葬が繰り返されたことが、多数の墓壙が重複して切り合う結果となっており、埋葬小群が数世代にわたり踏襲されていたことが暗示される。しかし墓壙群で抽出された分節単位と大型堅穴住居群との間には、

明確な対応関係を指摘することはできない。

(2) 富並川周辺の縄文中期中葉の遺跡

尾花沢盆地西部の最上川左岸に位置する西海渕遺跡は、富並川流域の拠点集落であるが、その周囲には縄文中期の遺跡が多数点在する(図5)。下流部の面積450ha(4.5km²)の小盆地内には、西海渕遺跡を含め9遺跡(小林圭一 2012)が認められ、その代表的な遺跡が、大木8b式期の古道遺跡(村山市)と大木9式期の中山

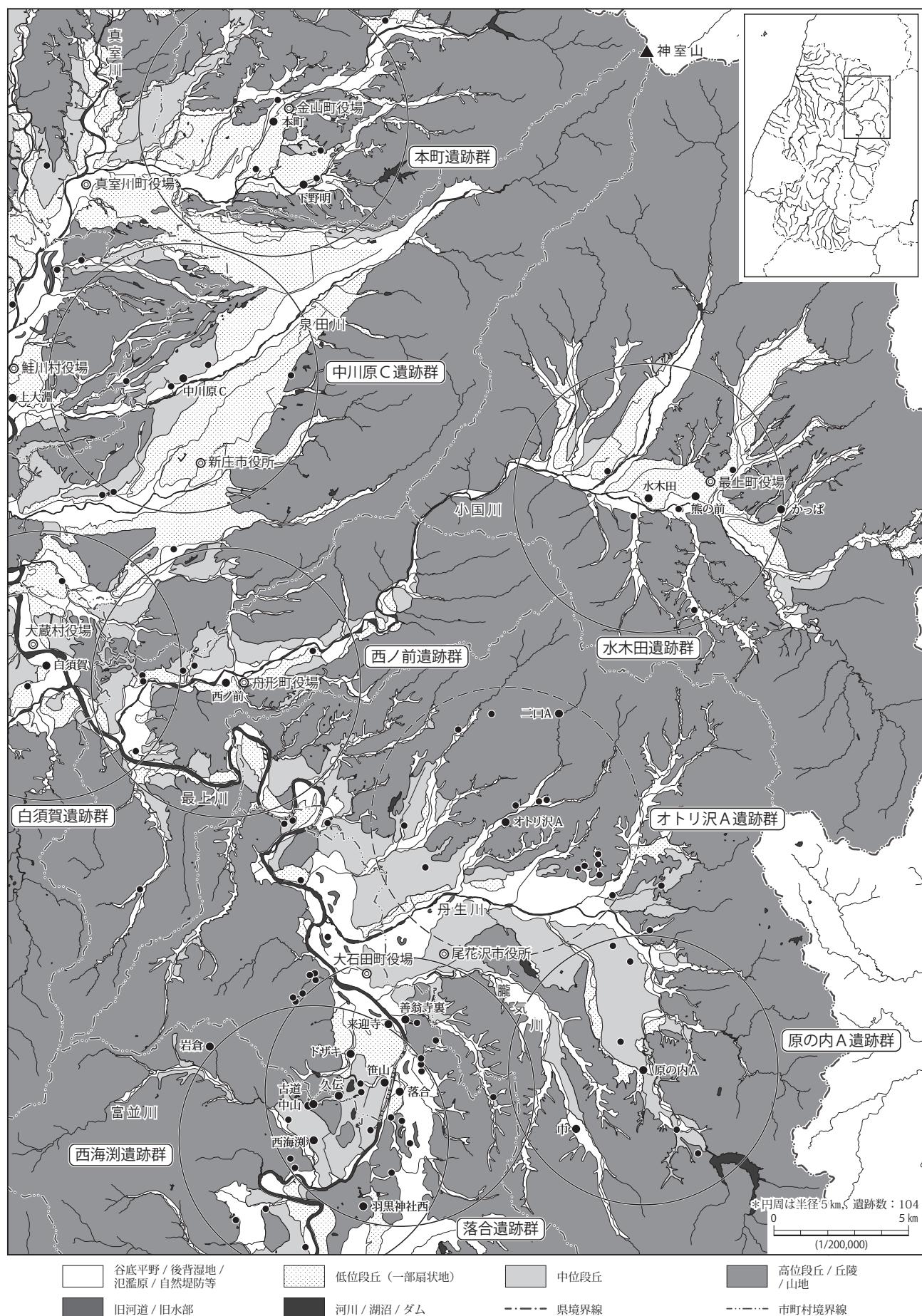


図5 山形県北東部の縄文時代中期前葉・中葉（大木7a～8b式期）の遺跡分布

遺跡（村山市）である。両遺跡は西海渕遺跡の北方 1.3 km の、大高根山から南東に伸びた丘陵先端の鞍部に位置しているが、僅か 100 m しか離れておらず、本来は一体の遺跡で、地点を異にして営まれていたと考えられる（図 6）。

古道遺跡は大木 8b 式期を主体とした西海渕遺跡と同時期の遺跡であるが、円形・楕円形・不整円形の住居跡が 10 棟検出されている（図 7）。住居は舌状に張り出した台地の周縁部を取り囲むように配列され、重複や建て替えの痕跡が顕著で、長方形の大型竪穴住居は認められない。住居の長径は 3 ~ 6 m の範囲にあり、主柱穴は 4 ~ 7 基が多く、床面の中心部に石囲炉（ST 2 ~ 6）が構築され、周溝を巡らした例（ST 2・3）は少ない。また主柱穴内の床面が一段低くなるベット状遺構を有する例（ST 1・6）も散見される。本遺跡は、西海渕遺跡の最盛期の分村として機能していたと想定される。

中山遺跡は大木 9 式期の集落跡であるが、大木 8a 式土器の優品も採集されており（阿部 1982）、西海渕遺跡前後の時期の集落で、住居跡は 4 棟検出されている（図 8）。住居は丘陵先端の傾斜変換線付近の狭い範囲に、南東方向を出入口として並列して配されている。いずれも大木 9 式期の円形の住居で、直径 3 ~ 6.5 m で、壁柱穴と周溝を構造上の特徴とし、主柱穴は 3 ~ 5 基程度で、床面の南東寄りに馬蹄形・楕円形の石囲炉ないしは複式炉を有し、重複や同心円状の建て替えの痕跡が認められる。特に ST 3 は 7 回建て替えられており、ST 4 → (ST 1・2) → ST 3 の変遷が想定されている（佐藤鎮雄ほか 1977：88 頁）。中山遺跡は、西海渕遺跡の終末期の分村または廃絶後の集落であったと考えられ、最盛期の大木 8b 式期には古道遺跡の方に集落が形成されていたことになる。

また小盆地の範囲からは外れるが、古道遺跡の東方 1 km の久伝遺跡（大石田町）でも、大木 8b 式期の土坑が検出されている（佐藤鎮雄ほか 1977）。同遺跡は西海渕遺跡の北東方 2 km に位置しており、長径 2 m の不整円形の土坑（SK 2）の覆土上層から、大木 8b 古式の小型深鉢 2 点と土偶の脚部が出土している。

富並川上流の大高根川の渓谷沿いには、岩倉遺跡（別称小高根遺跡）が位置している。西海渕遺跡の北西方 5 km に位置し、大木 7b ~ 9 式土器が出土しており、西海

渕遺跡よりも継続期間が長くなっている（阿部 1982）。山間部の遺跡であるが、大木 8a・8b 式の完形土器が多数出土し、有孔鍔付土器も認められることから、一時的なキャンプ地と見るよりも、山間地における西海渕遺跡の分村として重要な位置を占めていたと考えるべきであろう。

最上川左岸の横山・田沢地区では、ドザキ遺跡（大石田町）が大木 8b 式期の集落として存している。1995 年の調査で、長軸 9 m、短軸 4 m の長方形大型竪穴住居と思われる柱穴列^(註2) が 2 棟並列して検出されたが、主柱穴は 2 本 1 対で 5 対が等間隔に配列され、長軸線上の床面からは地床炉が 2 ~ 3 基検出された（石井 1996）。ST 1 の炉 3 基のうち中央の炉は石囲炉で、南側の地床炉との間の床面から欠損した石棒が出土し、また ST 2 からは土偶の破片が出土した。西海渕遺跡周辺の最上川左岸で長方形大型住居が検出された唯一の遺跡で、並列した住居の配列から、環状構成をなす可能性も考えられる。西海渕遺跡の北東方 3.5 km に位置しており、その分村であったと見られるが、横山・田沢地区の中核的な集落として機能したのであろう。

同地区の最上川左岸沿いには、多数の遺跡が立地しているが、広大な面積を持つ遺跡として、来迎寺遺跡（大石田町）と 笹山遺跡（大石田町）が存する。来迎寺遺跡は、西海渕遺跡の北東方 5 km に位置した縄文中・後期の遺跡で、遺跡の範囲は東西 600 m、南北 250 m を測る。遺跡の詳細は判然としないが、1979 年の調査で大木 7b ~ 8a 式期の円形の小型住居（径 2.6 m）や大木 7b 式の埋設土器が検出されている（名和ほか 1981）。なお対岸には、ヒスイ製大珠 3 点が採集されたと推定される善翁寺裏遺跡（大石田町）が位置している。 笹山遺跡（別称小野原遺跡）は、西海渕遺跡の北東方 3.1 km に位置した縄文早～中・晚期の遺跡で、南北 1 km、東西 100 ~ 300 m の範囲で遺物の散布が認められる。中期では大木 7a ~ 8b 式期の遺物が採集されているが、1970 年の調査で大木 8b 式期の楕円形の中型住居（7.5 × 6.5 m）が検出されている（加藤 1985）。なお対岸には、最上川右岸の拠点集落である落合遺跡（村山市）が位置している。来迎寺・ 笹山の両遺跡は西海渕遺跡の分村として機能し、最上川本流での生業活動に従事していたと想定される。またその他に、田沢新田遺跡（村山市）で大

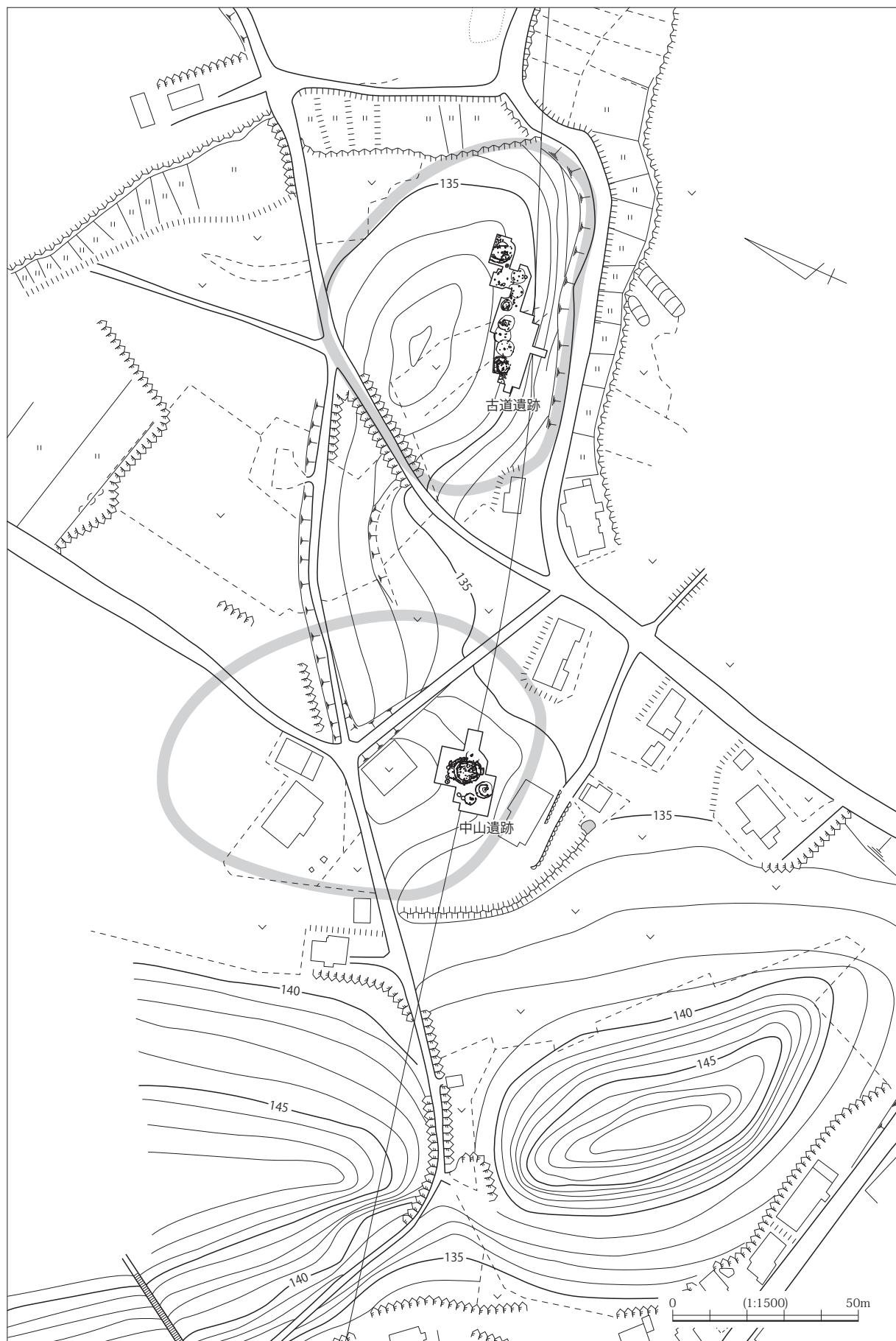


図6 村山市古道遺跡・中山遺跡全体図

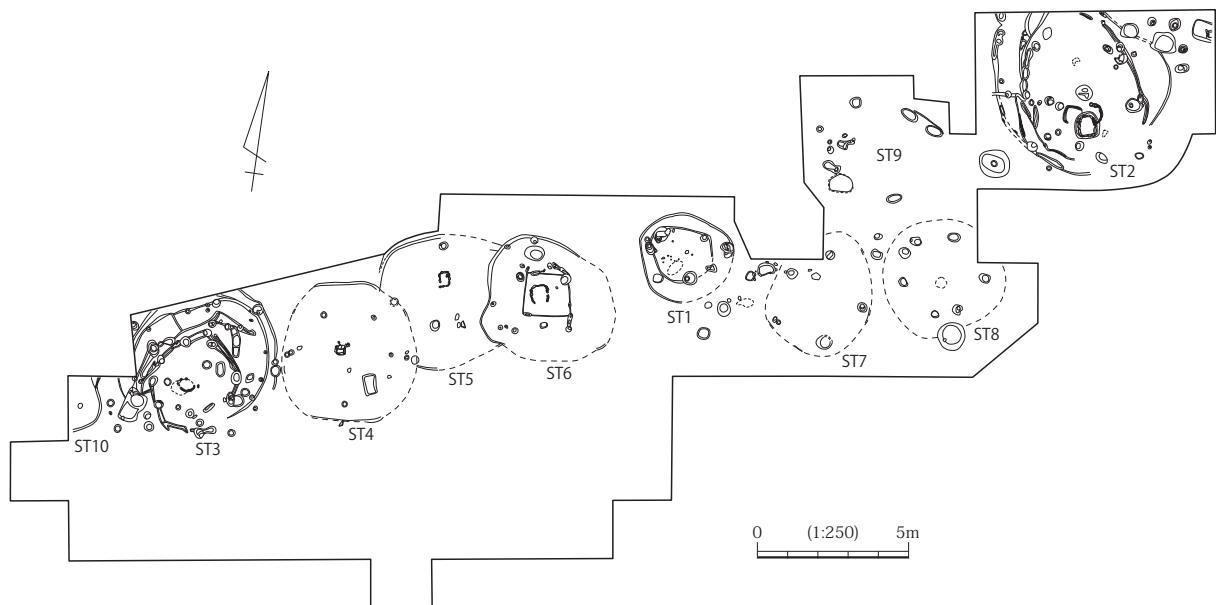


図7 村山市古道遺跡の集落構成（大木8b式期）

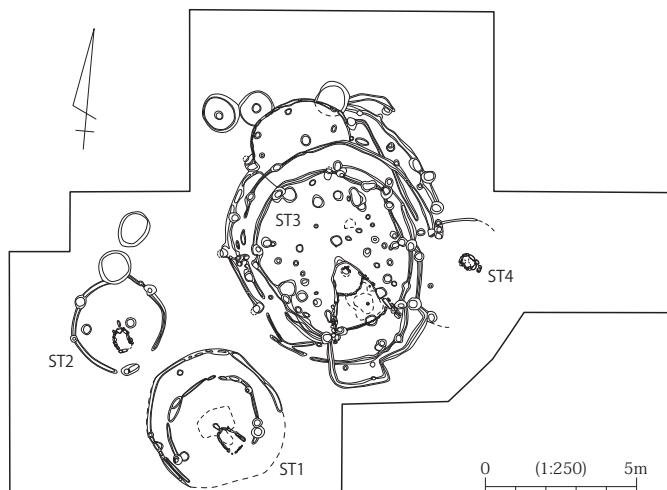


図8 村山市中山遺跡の集落構成（大木9式期）

木7b～8a式土器、深沢・向山遺跡（村山市）で大木7b・8b式土器が出土している（阿部1982）。

西海渕遺跡成立以前の最上川左岸では、中山遺跡と来迎寺遺跡が中核の集落として機能していたと考えられる。対岸には落合遺跡が拠点集落として存立しており、西海渕遺跡の継続期間を通して並存の関係にあった（表1）。西海渕遺跡の集落が成立するに当たり、対岸の落合遺跡から集団の一部が移住してきた可能性も否めないが、最上川左岸に分散していた単位集団が大木8b式期に集住して、一定の分節構造に基づいて組織化され、大規模な環状集落の成立に至ったのであろう。

（3）富並川流域以外の中期中葉の遺跡

富並川流域以外の尾花沢盆地の中期中葉（大木8a・8b式期）の規模の大きな集落としては、最上川を挟んだ対岸の落合遺跡（村山市）と、丹生川中流域の原の内A遺跡（尾花沢市）が指摘される（図5）。

落合遺跡は西海渕遺跡から北東方3.5kmの最上川右岸の低位段丘面に位置し、東西300m、南北600mの広がりを持つ大規模な遺跡である。1970年に開田のため遺跡の一部が破壊され、大木7b・8a式を中心にして大木7a～9式までの遺物が多数採集されている（阿部1982）。また農道工事に伴う2m幅のトレーニング調査が、1995年に山形県埋蔵文化財センターによって実施され、大木7b～8a式期の住居跡6棟やフラスコ状土坑

等が検出され、それらの遺構が一定の区域に偏在する傾向が指摘されている(山口・渡辺1996:33頁)。これまでの採集品や上記した調査から、尾花沢盆地西部の最上川右岸の拠点集落であったことは明らかで、西海渕遺跡とは並存の関係にあった。また落合遺跡の北方2.5km(西海渕遺跡の北東方5.5km)の五十沢川河口には、ヒスイ製大珠3点が採集されたと推定される善翁寺裏遺跡が位置している。詳細は明らかでないが、遠隔地の稀少資源が持ち込まれた求心力を有した遺跡で、落合遺跡と共に該域の拠点集落になっていたと思われる。両遺跡の対岸には、前記した比較的規模の大きな来迎寺遺跡と笹山遺跡が位置している点も興味深い。

山形盆地との境界となる河島山丘陵には、羽黒神社西遺跡が位置している。同遺跡は2014・2015年に山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、大木8b式土器が多量に出土した。遺構としては、盛土遺構やフラスコ状土坑17基の他に、長軸11m、短軸4mの柱穴列が検出された。大型の竪穴住居跡と思われ、主柱穴は2本1対で5対配列され、長軸線上の床面で石囲炉や焼土遺構が認められた。同遺跡は丘陵の傾斜地に立地するものの、貯蔵施設や居住施設を有しており、大木8b式期の尾花沢・山形盆地境界の有力遺跡であったと考えられる。時期的に西海渕遺跡と並行し、直線では3kmの位置関係にあるが、両遺跡間には最上川が介在しており、寧ろ北方4.5kmの落合遺跡との関連性が強かったと想定される。

尾花沢盆地東部で中期中葉の拠点集落と見られるのは、丹生川中流域の原の内A遺跡である。合流点から丹生川を約20km遡った尾花沢盆地の奥底に位置しており、西海渕遺跡の東方12.5kmに当たる。1980・1982・1987年に発掘調査が実施され、竪穴住居とフラスコ状土坑の集中地点が確認された。特に1982年の調査では大木7b～8b式期の住居12棟の弧状の配列が、また1987年の調査ではフラスコ状土坑16基が集中して検出された。住居は大木8b式期が主体で重複が著しく、平面形は円形ないしは楕円形で周溝は認められず、炉の大半が石囲炉であった。遺跡の規模が大きく、遺構が一定の区域に集中し、大木7b～8b式の完形土器が多数出土したことから、該域の拠点集落であったと考えられる。「西ノ前型土偶」が多く見られ、馬高式土器や有孔

鍔付土器が出土したこともその例証となろう。しかしこれまでの調査で、長方形大型住居は検出されていない。

その他の尾花沢盆地の有力な遺跡としては、同盆地北部のオトリ沢A遺跡(尾花沢市)と、おぼろげ 龍気川流域の巾遺跡(尾花沢市)が挙げられる。オトリ沢A遺跡(別称牛房野遺跡)は丹生川支流の牛房野川を約3km遡った山間河谷に位置しており、詳細は不明であるが、大木8a・8b式土器の優品が採集されている(阿部1982)。尾花沢盆地北部にはその他に有力な遺跡が見出せないことから、本遺跡が該域の拠点集落になっていた可能性が考えられる。また巾遺跡は、龍気川流域の山間河谷の比較的規模の大きな遺跡(南北約500m、東西約100m)であるが、1982・1983年の調査では大木7b～9式土器が出土し、大木8a式期の埋設土器群が検出されている(大類1983、1984)。

(4) 山形盆地の中期中葉の遺跡

山形盆地北半の縄文中期の遺跡数は、尾花沢盆地に比べると少なく、山麓の扇頂部の山裾と沖積低地の扇端・前縁部に分布している(図9)。盆地北半の西側は段丘地形となるが、お月山遺跡(河北町)が有力遺跡として位置している。同遺跡は大木7b～10式期の遺跡で、1953年の調査で石囲炉を持つ住居跡が検出されているが、詳細な内容は明らかでない。山形盆地東側の乱川扇状地では、中期の遺跡として小林遺跡や猪野沢横台遺跡が位置するが、大木9・10式期の遺跡であり、現時点では中期中葉の有力遺跡は指摘できない。

たちやがわ 立谷川扇状地扇頂部の山裾には、でんがくだいら 伝覚平遺跡(天童市)を中心に中期遺跡の集中が見られる。詳細は明らかでないが、大木8a～9式の規模の小さな遺跡群となっている。まみがさきがわ 馬見ヶ崎川扇状地扇頂部では、熊ノ前遺跡(山形市)が大規模集落となる。これまでの調査で、大木8a～10式期の住居が58棟、埋設土器11基、土坑等が検出されている。集落構成は判然としないが、住居の重複が著しく、微高地上に北西～南東方向にかけて帶状の集中が認められており、山形盆地南半の中期後半の拠点集落であったと考えられる。

山形盆地南西部の本沢川左岸には、どどやま 百々山遺跡(山形市)が位置する。同遺跡は正式な発掘調査が実施されていないが、若干の大木6式土器と多量の大木7b式の完形土器が採集されている(佐々木1995)。西ノ前型土

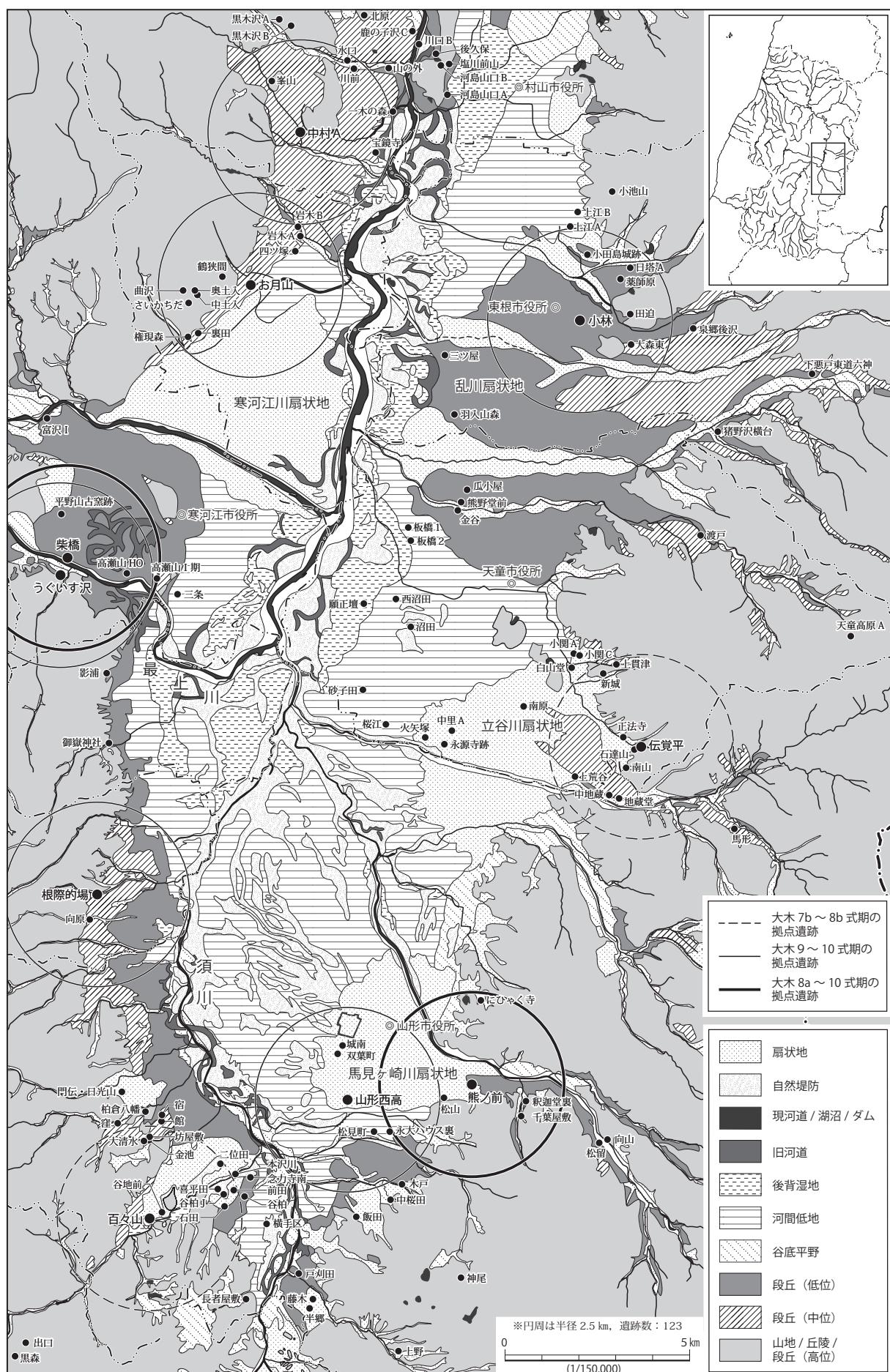


図9 山形盆地の地形分類と縄文時代中期の遺跡分布

偶の脚部資料や三脚土製品も認められており、本沢川流域の拠点遺跡であったと考えられる。

山形盆地中央西端の最上川左岸には、高瀬山遺跡（寒河江市）と柴橋遺跡（寒河江市）が位置している。該域は最上川が山形盆地に流れ込む谷口で、段丘地形が展開するが、柴橋遺跡は高瀬山遺跡の西方2kmに位置する。高瀬山遺跡では大木8a～10式期の住居が検出されているが、大木8a式と同8b式の住居が各1棟検出されたのみで、主体は中期後葉にある。柴橋遺跡では大木10古・中式の住居9棟と共に、大木8b式の長方形大型住居1棟が検出されている。長方形住居(ST10)の長軸の一端は未検出であるが、長軸の残存長8.2m、短軸4.2mを測り、4対の柱穴配列と地床炉3基の配列が認められた。また深さ3m超のフ拉斯コ状土坑(SK1)も検出され、同式期に帰属されている。掘方のしっかりした大型住居であることから、同遺跡が中期中葉の拠点集落になっていた可能性が高い。

山形盆地では、中期になると沖積低地への遺跡の進出が顕在化する（図9）。乱川扇状地前縁部の最上川氾濫原に接する板橋1遺跡・板橋2遺跡（天童市）では、大木7a式の土器が纏まって出土している（齋藤2004）。立谷川扇状地前縁部の砂子田遺跡（天童市）でも、大木8a・8b式の土器が地山面から出土しており、完形の大木8b式の小型深鉢が特筆される。両遺跡とも中期の遺構は検出されていないが、その他にも前縁部には願正塙遺跡（天童市）と沼田遺跡（天童市）、扇端部には熊野堂前遺跡（天童市）と瓜小屋遺跡（天童市）が位置しており、いずれも大木7b～9式期の遺跡となっている。低地部の微高地にも中期の集落が形成されていたと考えられる。

（5）西海渕遺跡以降（中期後葉）の様相

西海渕遺跡では、大木9古式で集落が廃絶される。それ以降川口遺跡が成立する後期前葉南境2式期までは、富並川流域に規模の大きな遺跡は認められない（小林圭一2012）。図10は山形県北東部の中期後葉（大木9・10式）の遺跡分布図であるが、富並川流域の中期後葉の遺跡としては、上流の大高根川の渓谷沿いに山ノ内遺跡（別称ガンジヤ遺跡）が位置している。同遺跡は早期の遺跡として著名で、中期の内容は判然としないが、大木10新式の埋設土器が報告されている（阿部

1982）。隣接する岩倉遺跡（大木7b～9式期）から地點を移したのであろう。最上川左岸では来迎寺遺跡で青竜刀形石器と共に大木10式土器が採集されている（加藤1985）。また西海渕遺跡の南西方2.5kmに位置する小国沢遺跡（別称三ヶ瀬遺跡）では、大木9新式の土器が採集されている。富並川流域の周辺では、規模の小さな集落に分散した居住システムに転換したことが想定される。

尾花沢盆地に位置する近隣の拠点集落も、西海渕遺跡と同様の経過を辿っている。大木7a式以来の最上川右岸の拠点集落であった落合遺跡は、大木9古式で姿を消す。また尾花沢盆地東部の原の内A遺跡も、これまでの調査では大木9式以降の遺物が認められていない。尾花沢盆地の既存の大規模集落は中期後葉に衰退の傾向にあるが、阿部明彦氏が示した村山市内（山形盆地の北部と尾花沢盆地南西部を合わせた地域）の縄文中期の遺跡数の推移からも、その傾向が跡づけられる。即ち村山市内では、大木7a式6遺跡→同7b式9遺跡→同8a式17遺跡→同8b式16遺跡→同9式10遺跡→同10式4遺跡と推移しており、中期末葉の凋落が著しい（阿部1982:272頁）。

西海渕遺跡の周辺では、南方8kmに位置する中村A遺跡（村山市）が、比較的大きな集落に相当する（図9）。山形盆地北西端に位置しており、大木10式期の住居が9棟検出され、また関東地方の加曽利EIV式の埋設土器（横位）も認められる（名和・渋谷1983）。中期中葉大木8a式～後期中葉宝ヶ峯2式の土器が出土しており、継続期間が長い遺跡となっているが、主体は中期末葉の大木10式期にある。富並川流域を含む山形盆地北西部の拠点遺跡であった可能性が考えられ、西海渕遺跡の集落が解体して、集団が分散した居住システムに転換したと見るならば、本遺跡はその後裔の有力候補に挙げることができるであろう。

（6）小 結

尾花沢盆地の中期中葉には、最上川左岸に西海渕遺跡、最上川右岸に落合遺跡と善翁寺裏遺跡、丹生川中流部に原の内A遺跡を中心とした領域が形成されていたことを想定した。西海渕遺跡と落合遺跡は僅か3.5kmしか離れていないが、その間には最上川が介在しており、両遺跡の領域の境界になっていたと考えられる。該域の最上川

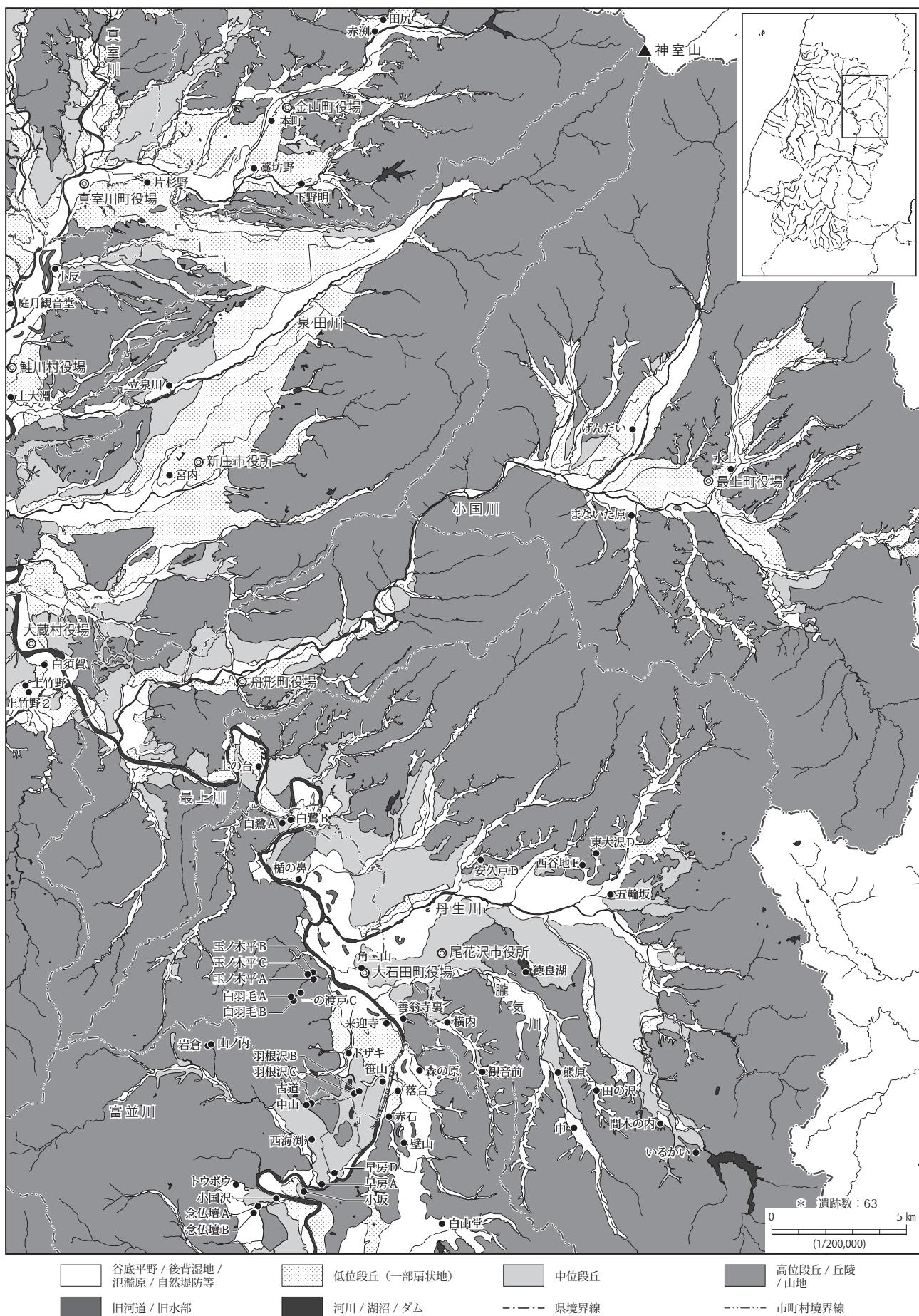


図 10 山形県北東部の縄文時代中期後葉（大木9～10式期）の遺跡分布

は急流（隼の瀬）^{はやぶさ}となっており、渴水期を除くと、日常的な往来の妨げになっていたことが予想される。

谷口康浩氏は、関東地方南西部において大規模かつ継続性の強い拠点的な環状集落が、8～9 km程度の間隔で均等的に分布する点に着目して、集落領域の規模を試算している。同氏はティーセン多角形分析を応用して、各集落の領域面積が30～98 km²の範囲にあり、45～65 km²程度の規模が多く、平均値を63 km²と算出し、半径4.5 km弱の円圏の面積にほぼ等しいことを指摘している（谷口 2005：117・143頁）。

上記の基準を当該域に準用するならば、富並川下流部の小盆地の面積は450ha（4.5 km²）で、僅か1/10程度の面積でしかなく、西海渕遺跡の集団の生活基盤となる領域としてはかなり狭いことになる。富並川下流部だけでなく、半径5 km程度の最上川左岸一帯の範囲が、西海渕遺跡を核とした集団の領域であったと想定されよう（図5）。具体的には、前記した古道・久伝・岩倉・ドザキ・来迎寺・笛山遺跡等が西海渕遺跡の領域に含まれ、遺跡周辺での堅果類の採集をはじめ、最上川本流や富並川の淡水産資源の捕獲、葉山や大高根山東麓における食料資源の捕獲・採集を通して安定した生業活動が営まれ、地域社会の存立基盤になっていたと考えられる。採集生産活動が低調となる冬季などの一時期、集団領域内に散在していた単位集団が西海渕遺跡に寄り集まって大集落を形成し、共同作業や祭祀等を執り行っていたのであろう。

尾花沢盆地には多数の中期遺跡が分布するが、盆地東部は丘陵の裾部や河川沿いの山間河谷、盆地西部は最上川沿いに顕著に認められる。前者の原の内A遺跡は丹生川中流域とその周辺の丘陵・山地、後者の落合遺跡と善翁寺裏遺跡は最上川右岸や五十沢川周辺の丘陵地を生活領域として、最上川左岸の西海渕遺跡の領域と接していたと考えられる。また尾花沢盆地北部の丹生川下流域には、牛房野川沿いのオトリ沢A遺跡を中心とした領域が形成されていたのであろう。

該域の拠点集落では、磨石、凹石、石皿等の調理具類が多く出土しており、集落の人口を支えるために植物質食料の製粉加工に依存した生業活動の姿が浮かび上がってくる。植物質食料の資源量の増大や生産力を高める技術の開発が、集合的居住を可能にし、大規模環状集落が形成されたのであろう。

尾花沢盆地では、中期中葉の拠点集落である西海渕・落合・原の内A遺跡が、大木9式前後の時期を境にして衰退する。求心的な社会組織を解体させるような社会的・文化的要因が働いて、人口規模が縮小し、分散した居住形態に変化していったのであろう。その背景には、気候の冷涼化による環境変化が大きく関係していたのかもしれない。該期は複式炉が盛行し、円形基調の規格化された住居が構築される時期となっており、中期社会の転換期に相当した可能性が考えられる。

5 西ノ前遺跡の集落構成と領域

(1) 西ノ前遺跡の集落構成

西ノ前遺跡は西海渕遺跡の北方約17.5 km、最上川中流域の小国川左岸の舌状に張り出した段丘上に立地する（図5）。発掘調査は道路建設に伴って山形県教育委員会により1992年に実施され、大木8a式期の大型土偶（2012年国宝指定）が出土したことで著名である。長方形竪穴住居を主体とする環状ないしは馬蹄形の集落構成で、集落の西側半分が調査された（図11）。集落は大木7b～8b式期にかけて形成されており、台地の縁辺に沿って住居が配置され、住居9棟とプラスコ状土坑60基を含む200基以上の土坑が検出されたが、集落が乗る段丘は、小国川等の浸食により北端や西側付け根付近の居住域が崩落した可能性が高く、本来の住居数よりも少なくなっていると考えられる。住居同士は重複せず、大半は長軸10 m前後、短軸4 m前後の長方形の大型住居からなり、壁面は不明瞭で、柱穴の重複が著しく、主軸を集落の中心に向けた求心性が認められる。殆どの住居が大木8a式期に構築されており、住居群の内側に位置するST34のみが大木8b式期に帰属され、該期には環状の規制から除外された様相を窺わせる。

調査区の南端では、自然地形と考えられる沢状の落ち込み（SX261）が検出された。東西方向に長さ36 mにわたって集落を分断しており、東側は幅7.5 m、西側は14 mを測る。堆積土は18枚に区分され、検出面からの最大層厚は2 mを測り、整理箱で750箱の膨大な量の縄文土器と石器・石製品が出土したが、大木7a新式土器が若干出土した以外は、大木7b～8b式土器で占められており、特に大木8a式が主体となる。集落の継続期間を通して投棄行為が繰り返されていたことを示し

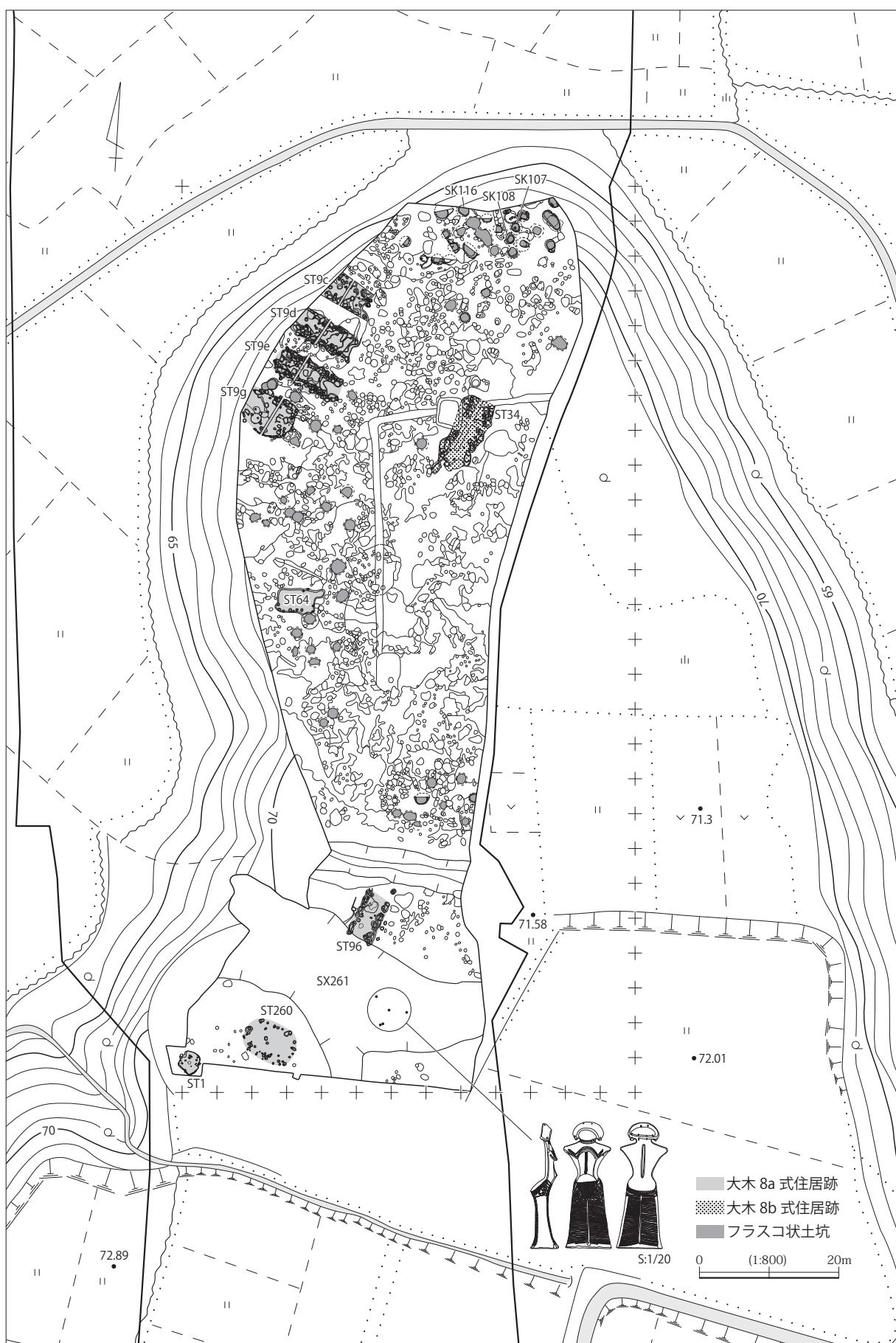


図 11 舟形町西ノ前遺跡の集落構成

ているが、埋土中からは著名な大型土偶（図12）も5片の部位に分かれて出土している。

西ノ前遺跡は、西海渕遺跡に先行する大木8a式の長方形の大型住居を主体とする環状ないしは馬蹄形の集落である。西海渕遺跡に比べると規模は小さく、住居数も格段に少ないが、出土品の内容や数量から、小国川下流部の小盆地である舟形盆地を生活の領域とした拠点集落であったと考えられ、集落の存続時期からすると17.5km離れた西海渕遺跡とも関連を有していたと推測される。

（2）西ノ前遺跡と周辺遺跡の領域

最上地方の大木7b～8b式期では、最上川左岸に白須賀遺跡（大蔵村）、小国川上流部に水木田遺跡（最上町）、新庄盆地に中川原C遺跡（新庄市）、金山盆地に本町遺跡（金山町）、尾花沢盆地の最上川右岸に前記した原の内A遺跡（尾花沢市）と落合遺跡（村山市）を中心とした領域が形成されており、西ノ前遺跡はそれと密接な関係を有しながら生活領域を維持していたことが想定される（図5）。

西ノ前遺跡の周辺では、小国川に沿って経壇原・沖野原・一本木台・長者原・稻場遺跡等が位置している。いずれも詳細は不明だが、大木7b～8a式期に営まれたことから、西ノ前遺跡の分村としての機能が推定される。

西ノ前遺跡の西方約7kmに位置する白須賀遺跡は、銅山川が最上川に合流する段丘上に立地し、当該域の拠点集落と見られている。1954年に柏倉亮吉氏等の山形大学により発掘調査が実施され、複式炉が検出されたが、この調査で出土した大木8b式の注口土器（山形大学所蔵）は、2004年に山形県の有形文化財に指定されている。また西ノ前型土偶の脚部や足形付土製品も採集されており、遺跡は大木8a式から後期初頭まで継続している（大友1999）。同遺跡の南西方1kmには晩期後葉～弥生中期で著名な上竹野遺跡（大蔵村）が位置するが、大木7b式土器や北陸の新崎式土器も出土しており、白須賀遺跡との関連が想定される。

水木田遺跡は向町盆地のほぼ中央、西ノ前遺跡から小国川を約23km遡った地点（直線では北西方17km）に位置し、大木7b～8a式に主体がある。1978年山形県教育委員会によって発掘調査が実施され、竪穴住居跡8棟（大木7b式1棟、同8a式6棟）と土坑、集石、

配石遺構等が検出され、中でも4×16mの範囲で一括廃棄された90点におよぶ大木7b式の完形土器が特記される。出土した土器・土製品136点と石器・石製品194点は、「東北地方の縄文中期文化を知る上で貴重な資料」として、2011年に国の重要文化財に指定されている。大木7b式土器が卓越し、関東の五領ヶ台式の影響を受けた土器や東北北部の円筒上層b式に類似した土器、北陸の新崎式の土器片も出土している。向町盆地は小国川に沿った奥羽脊梁山脈中の小盆地で、宮城県方面への交通の要衝となっている。水木田遺跡で出土した広汎な土器の内容は、その地理的特性を反映した可能性があり、日本海側と太平洋側の中継地としての遺跡の役割が推定される。水木田遺跡の周囲には、大木8a式の竪穴住居跡3棟が検出された熊の前遺跡（最上町）、同式土器の捨場跡が検出されたかっぱ遺跡（最上町）が位置しているが、いずれも水木田遺跡の分村として営まれたのであろう。

中川原C遺跡は新庄盆地を流下する泉田川右岸の段丘（中位面）に立地し、大木7b～8a式に主体がある。1999・2000年に山形県埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施され、建物跡22棟、埋設土器35基、大規模な捨場跡が2ヶ所（A区SX126：大木8a式主体、B区SX101：大木7b～8a式主体）が検出された。建物跡は掘り込みが明確でなく、柱穴と炉跡のみ検出されたが、縦長構造の大型建物跡4棟と4本柱の建物跡4棟が含まれる。膨大な遺物の出土量、広大な遺跡範囲、大型建物跡の存在から、「拠点的な大規模集落」（佐竹2002）と評価されており、新庄盆地の中核の遺跡であったと考えられる。

本町遺跡は金山盆地北側の金山川左岸の低位段丘に立地し、大木7b～8b式に主体がある。1980年金山町教育委員会によって発掘調査が実施され、中期中葉の円形竪穴住居跡が13棟検出された（長沢ほか1981）。また無頭の石棒を直立させた祭祀遺構が特筆される。石棒は根幹部を欠損した円筒形で、平坦な先端部に二重の同心円が彫り込まれており、現存の長さ13.2cm、直径9.3～10cmの小型品で、ほぼ垂直に立った状態で検出された。石棒の掘方の直径は25cm程度、深さが20cm程度で、それを中心に直径2mの範囲に約10cmの厚さで黄色粘土が敷設され、その外周に柱穴8基が巡らされ

ていた。石棒を中心として直径3m程度の円形の建物施設と推定され、石棒祭祀に係わる特殊な遺構であったと思われる。本町遺跡の南東方2.5kmには、金山盆地南縁を西流する下台川右岸の下野明遺跡（金山町）が位置する。大木7b式の西ノ前型土偶（図13-12）が出土しており、本町遺跡と関連を有していたのであろう。

鮭川盆地では発掘調査された遺跡が少なく、また分布調査も不十分で、詳細は判然としない。鮭川左岸の段丘に位置する上大淵遺跡（鮭川村）が大木7b～9式の遺跡であると指摘されており、該域の有力な遺跡と考えられる。

最上地方の中期中葉では、地理的な単元ごとに有力な遺跡が存し、それ等を取り巻くように小規模遺跡が分布する。小盆地を単位として生活の領域が営まれて、また有力な遺跡間でも相互の関係を有していたと推定される。その中で、白須賀遺跡－西ノ前遺跡－水木田遺跡を結んだラインは、直線で7kmと17kmの位置関係にあり、小国川を通して日本海側と太平洋側を結ぶ主要な経路になっていたと考えられる。それぞれ遺跡が中継地としての役割を担っていたのであろう。

（3）最上地方の中期後葉の様相

図郭内の最上地方では、上記した有力遺跡の多くが、大木8b式前後で集落の営みを終止しており、大木9式以降も継続するのは白須賀遺跡に限られる（表1）。同遺跡は大木8a式～後期前葉まで長期に渡って継続しており、1957年の調査で中期後葉の複式炉が検出されている（大友1999）。遺跡の詳細は判然としないが、居住施設が確認されたことから、最上川本流沿いの有力遺跡であった可能性は高い。なお舟形盆地の西ノ前遺跡は大木8b式期で集落形成を終止したが、同盆地には現時点で中期後葉の遺跡は認められない（図10）。

小国川を遡った向町盆地では、盆地中央の水木田遺跡が大木8a式で集落が終止し、中期後葉では絹出川沿いに水上遺跡（最上町）、白川沿いにげんだい遺跡（最上町）が存している。水上遺跡は大木8a式～後期中葉まで継続し、後期前葉に主体があり、げんだい遺跡は大木10式の埋設土器が検出されたのみである。水木田遺跡のような核となる遺跡が消失し、分散した居住形態への転換を窺わせる。

新庄盆地では、泉田川右岸の立泉川遺跡（新庄市）

が有力な遺跡となる。中川原C遺跡の西方300mに位置し、1998年に山形県教育委員会により発掘調査が実施されたが、段丘先端部の斜面に中期末葉（大木10古式）～後期初頭にかけての遺物包含層（捨場跡）が検出され、約150箱分の遺物が出土した（佐竹2002）。周囲が大きく削平を受けたため、その他の遺構は検出されなかつたが、中川原C遺跡を継承したと考えられる。但し大木9式期がブランクとなっており、両遺跡は継続的に移行していない。

金山盆地では詳細は明らかでないが、片杉野遺跡（真室川町）で複式炉が検出されている（大友1969）。鮭川盆地では、小反遺跡（鮭川村）が拠点集落となる。同遺跡は鮭川左岸の低位段丘面に立地し、大木9新式～10古式の竪穴住居跡が14棟検出されたが、径9mの大型住居跡（ST5）や6本柱の亀甲形の掘立建物跡（SB349）も認められ、大木9式から同10式への過渡期に営まれた比較的短期の集落となっている（水戸部ほか2006）。

最上地方では、尾花沢盆地でも見たように、大木8b式を境に多くの遺跡が集落形成を終えている。これまで発掘調査された中期後葉の比較的規模の大きな集落は、小反遺跡と鮭川支流真室川沿いの金淵C遺跡（図郭外）に限られる。白須賀遺跡は複式炉、立泉川遺跡は捨場跡の検出のみで、集落の内容は判然としないが、中期中葉のような小盆地毎の有力遺跡の配置は認められず、規模の小さな集落が分散していたように窺える。また多くの遺跡が中期末葉で廃絶される中で、白須賀遺跡、立泉川遺跡、水上遺跡、金淵C遺跡は後期前葉まで続いている、継続期間の長さが特筆される。

6 「西ノ前型土偶」について

長脚立像で出尻形を基本形とする西ノ前型土偶は、大木7b～8a式期の山形県内陸部から宮城県南部に主体的に分布する。縄文前期後葉に北上川中～下流域に展開した板状土偶に系譜が求められ、中期初頭の大木7a新式・竹ノ下式並行期に薄い体部の有脚立像として登場した。以下では、先行研究（阿部1998、中野2008・2014）を踏まえ、山形県北東部の中期を象徴する同型土偶を整理した。

（1）西ノ前遺跡出土の大型土偶

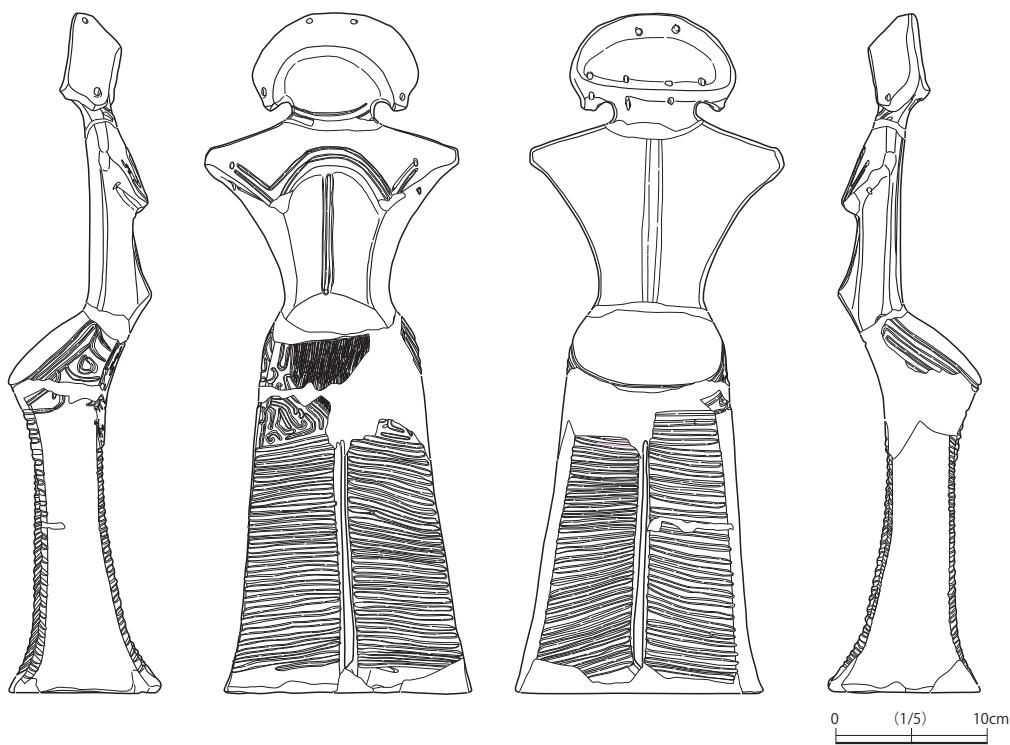


図12 西ノ前遺跡出土の大型土偶

西ノ前遺跡から出土した大型土偶（図12）は、全長45cm、肩幅16.8cm、腹部厚8.4cm、重量3,041g（復元前）を測り、「西ノ前型土偶」の基準資料となっている。脚端部が広がり安定して自立し、扁平な上半部から臀部にかけ後方に強く張り出す均整のとれたプロポーションから、「縄文の女神」と称されており、1998年に国の重要文化財、2012年には土偶で4点目となる国宝に指定されている。

頭部は扁平で扇形に作出され、後頭部と顔面は内湾する。面相は表現されず、後頭部は下端が水平に縁取られ半円形を呈しており、頭頂部に2孔、後頭部下端に4孔、両側頭部（耳部？）に各1孔の計8孔の円孔が穿たれる。

上半身は両腕が省略され、肩が三角形に張り出し、縦位の円孔が穿たれる。胸部はW字形の乳房が隆起で表現され、その下端が2条の沈線で縁取られる。また正中線は隆起線と沈線で描出され、背面には背筋に沿って幅広の凹線が垂下される。

下半身は腰部が括れ、腹部が円形刺突の臍を中心に迫り出しており、その直下の下腹部はホームベース形？に区画され、左傾の細密沈線が充填される。臀部は背中から弓なりに張り出し、丸味を帯びた稜線で臀部下面（脚部上端？）に接する。臀部上面は無文で、稜線直下が沈

線で縁取られ、下腹部脇の渦巻文を含む曲線文様と結合する。但し下腹部付近の沈線文様は復元された部分が多く、正確さには疑問が残る。

脚部は裾が広がる角柱状の脚を寄せ合わせ、腰部の張り出しとほぼ同じ幅となっており、下端が接地面で連結し、両脚間に縦に細長い透かしが存在する。両脚の正面と背面には平行沈線が左右対称に重層して加えられ、側面部は無文となる。なお両脚の底面が半球状に粗く抉られているが、焼きむらを避ける工夫と考えられている。

上記した大型土偶を基に「西ノ前型土偶」を定義すれば、頭部・体部・脚部の三つの部位で構成された長脚の立像土偶で、上半身が扁平で、臀部が強く張り出す出尻形である点が挙げられる。頭部の穿孔、三角形に張り出した肩部と括れた腰部、背筋の凹線、左右に分離した脚部と横位の集合沈線も特徴に加えられる。大きさでは、全長30cm以上の大型品、15～30cmの中型品、15cm未満の小型品に区分する案（黒坂1994：75頁）も提示されているが、全長の判明した例は極めて稀で、特に確実な大型品は西ノ前例に限られる。

（2）西ノ前型土偶の変遷

優美な西ノ前遺跡出土の大型土偶は、中期中葉の大木8a式期に帰属されている（中野2008）。出土状況から

の判断が困難であるため、先行すると見られる小梁川遺跡や中ノ内A遺跡出土土偶との対比から導出された系統観が前提となっている。

西ノ前型土偶の初現に位置づけられるのが、宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡出土の土偶（図13-1・2）である。同遺跡は前期末葉（大木6式期）に集落形成が開始されたが、中期初頭（五領ヶ台I～II式並行期）に一旦衰退し、大木7a新式期（竹ノ下式並行期）に再興を遂げ、大木8b式まで継続する（小林圭一 2017a）。1・2は東側遺物包含層から出土し、層位的証左は得られていないが、大木7a新式期の土偶と考えられる。また宮城県柴田町中ノ内A遺跡は、小梁川遺跡の北方約25kmに位置し、大木7a新式（第I群土器）と大木7b古式（第II群土器）に限定される遺跡で、3～8は後者に位置づけられる（註3）。上記から「小梁川例（大木7a新式）→中ノ内A例（大木7b古式）」の変遷が跡づけられ、西ノ前型土偶出現期の特徴は、以下のように整理される。

頭部形態はいずれも瓶栓形で、頭頂は円盤形で、短い円柱状を呈し、顔面表現はなく、貫通孔が1孔または3孔穿たれる。頭頂は当初水平な状態にあったが、3・5は後方にやや傾斜しており、正面が漸次上昇し、面相表現を持たない西ノ前例に至ったと考えられる。また出現期においては、円孔は1孔または3孔が通例で、後頭部の円孔が背筋の正中線（凹線等）に対応しており、対応しない4孔以上は新的様相と言えよう。

上半身は、いずれも板状で、両腕は省略される。1・2は肩部が緩く下がって三角形に張り出すのに対し、3・4の肩部は横に張り出して西ノ前例に近似しており、「なで肩」から「いかり肩」風への変遷が想定される。首部にV字形の沈線文様を持ち、胸部はW字形の隆帯で乳房が表現されるが、前方に突出した例（1）も存する。腹部は前方に膨らみ、臀部が後方に強く張り出すのが通例である。1は臀部の突出が弱いことから、板状土偶から立像土偶への過渡的様相を示すように思われる。

大木7b古式期の3・6～8を基に、下半身の特徴を見てみると、脚部の接地面での連結や、両脚間の縦長楕円形の透かし、重層した平行沈線といった西ノ前例の特徴は、既にこの時期に成立している。但し沈線には有節沈線が多用されており、古的様相と捉えることができる。なお脚部の多重沈線は水平ではなく、外側に傾斜して描出

される。

上記の見解を踏まえ図13を見ると、9・10・12・13・15・20が大木7b式に帰属される。臀部上面は無文が通例であるが、縦位のアンカー形や三日月形の文様を線対称に配した例（9・13・15・20）は、いずれも有節沈線で施文される。22は大木8b式主体の西海渕遺跡から出土した土偶で、西ノ前型土偶の終末段階に相当する。脚部下端が広がらず、立像としての機能は消失しているが、この形態は先行型式にも認められる。

図14は、西ノ前型土偶の面相表現を持った資料を集めた。出現期には面相表現のない瓶栓形（図13-1～3・5・10）が卓越するが、具象的な目・鼻・口が表現された例も散見される。頭頂部が扁平でやや後方に傾斜し、後頭部に背筋の凹線に対応した円孔を有した古的様相の例として、図14-23～25が指摘される。逆三角形の顔面で、Y字形の隆起線で眉と鼻、刺突で目と口が作出される。鼻孔を表した例（25）もあり、Y字形の眉部は弧状に表現され、その直下に目が細長く刺突され、口は円形刺突となる。26～29も逆三角形の顔面で、29の頭部形態は瓶栓形に近く、古的様相を留めている。いずれも大木7b式に帰属されよう。

顔面が正面を向き、頭頂部が扇形を呈した例は、西ノ前例に近似する。顔面形態は逆三角形（31～33）と丸形（35・36）が存し、Y・T字形の眉の直線化、頭頂の円孔の多孔化、後頭部の渦巻文様（31・36）が新的様相と捉えられ、大木8a式に帰属されると考えられる。

39～45は西海渕遺跡から出土した大木8b式期の土偶である。逆三角形の顔面形態で、眉と鼻がT字形の太い隆起線で表現され、彫りの深い顔立ちとなる。44は扇形の頭頂部、45は後頭部の渦巻文様を継承するが、頭部の円孔は失われ、縄文施文（41・45）が認められる。

西ノ前型土偶は大木7a新式（竹ノ下式並行期）に出現し、同7b～8a式に盛行し、同8b式に衰退する。最上地方の拠点集落（西ノ前・水木田・中川原C遺跡）の盛衰と歩調を合わせるように推移しており、大木8b式期には脚部を持たず底面が広がった土偶（45）が現れる。但し図示していないが、当該型式まで立像土偶は残存する（台ノ上・西海渕・羽黒神社西遺跡）。

（3）西ノ前型土偶の分布

西ノ前型土偶は、山形県内陸部から宮城県南部に主体



図13 「西ノ前型土偶」の集成とその関連資料（1）

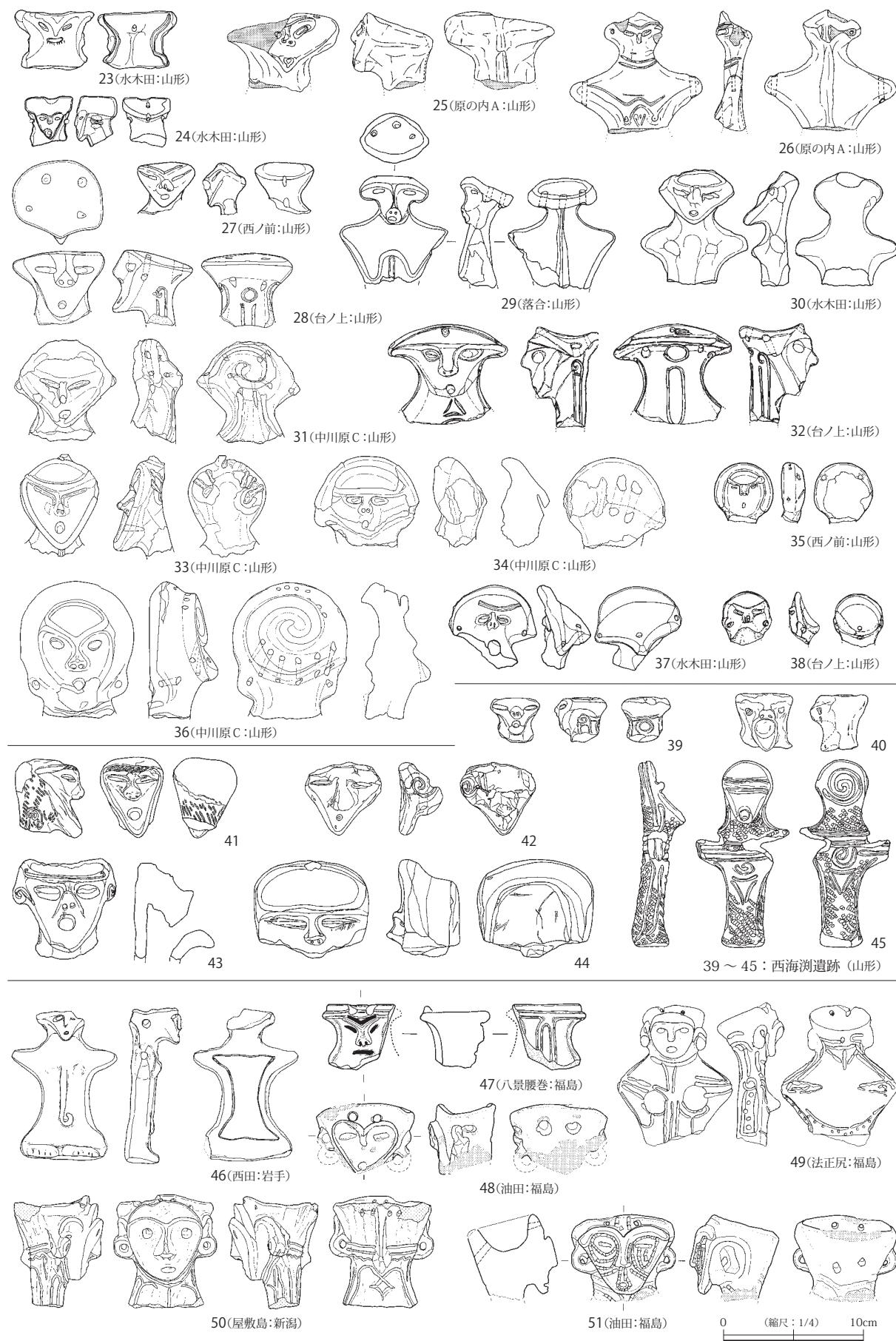


図 14 「西ノ前型土偶」の集成とその関連資料（2）

的に分布する(図15)。出現期の土偶は宮城県の遺跡に顕著である印象を受けるが、山形県内でも西ノ前遺跡や水木田遺跡に古的様相を留めた土偶が認められる。

山形県内では、最上地方や尾花沢盆地の遺跡で多く出土しており、特に西ノ前・水木田・中川原C・原の内A・落合遺跡が多量保有の遺跡となる。山形盆地では日々山遺跡、上山盆地では思い川遺跡(上山市)、長井盆地では宮遺跡(長井市)、米沢盆地では長岡山遺跡(南陽市)、台ノ上遺跡(米沢市)で出土しており、特に台ノ上遺跡では大木8b式の土偶を含め268点の土偶^(註4)が出土している。その多くは西ノ前型土偶に相当するが、山形県北東部の土偶と比べると乳房が前方に突出した例が多く、W字形の隆帯を持った例が少なくなっている。また円形透かしを特徴とする七郎内型に類した例も見られるなど、東北南部と接触する地域的特性を反映している。日本海沿岸の庄内地方は主体的分布域から外れるが、笙川扇状地の玉川遺跡群(鶴岡市)で西ノ前型土偶が出土している(酒井1991)。

宮城県では、前出の小梁川遺跡や中ノ内A遺跡の他に、両遺跡の間に位置する谷地遺跡(蔵王町)で中期土偶が約140点出土しており、相当数の西ノ前型土偶が含まれている(鈴木ほか2015)。中ノ内A遺跡は名取川水系、谷地遺跡と小梁川遺跡は阿武隈川水系に属しており、宮城県の南部に相当するが、その他に名取川下流域の上野遺跡(仙台市)、七北田川沿いの高柳遺跡(仙台市)でも出土しており、仙台平野までが主体的な分布域となる。松島湾沿岸の様相は判然としないが、鳴瀬川下流域の川下り響貝塚(東松島市)や石巻平野(北上川下流域)の糠塚貝塚(登米市)、長者原貝塚(登米市)、長根貝塚(涌谷町)でも、少量ながら板状土偶と併出することが指摘されている(藤沼1992)。

福島県では、福島盆地の月崎A遺跡(福島市)で西ノ前型土偶が僅かに認められるが、短脚の立像で、両脚間に円形透かしを有し、臀部の張り出しの弱い形態が主体となる。阿武隈川流域の中通りや会津地方には、腹部や臀部に有節沈線による左右対称の渦巻文等の曲線文様を基調とした「七郎内型」が分布しており、垂尻形の「亞西ノ前タイプ」とも称されている(阿部1998:192頁)。また同県の会津地方や新潟県の阿賀野川流域には、頭頂部が皿状で、穏やかな顔面表現を持つ「石生前型」(図

14-27~30)が分布しており、七郎内型が大木7b式、石生前型が大木8a式に帰属すると考えられる。

西ノ前型土偶が主体的に分布する山形県北東部の向町盆地と尾花沢盆地は、境田越と鍋越峠を通じて宮城県側と結ばれることは前記した。前者は江合川水系、後者は鳴瀬川水系に連絡しており、いずれも大崎平野を流下する。しかし大崎平野における西ノ前型土偶の出土例は少なく、仙台平野以南に分布の主体がある。地理的観点からは大崎平野との緊密な交流関係が想定されるものの、土偶については没交渉の関係にあったと言えよう。大崎平野に隣接する石巻平野から岩手県南部の北上盆地にかけた地域(北上川中~下流域)は、前期末葉から中期初頭の衰退期を免れた特異な地域で、有力な地域圏が形成されており、板状土偶やその系譜を引く土偶(図14-25)が展開していた。他地域に先駆け前期後葉(大木5式期)の段階に土偶祭式が盛行しており、西ノ前型土偶を受容しない素地が醸成されていたのであろう。

上記したように、大木式土器分布圏は中期前葉~中葉の土偶の分布状況から、三つの区域に大別される。

- ① 西ノ前型土偶を主体とした山形県内陸部から宮城県南部の地域。
 - ② 板状土偶の系譜を引く土偶を主体とした岩手県南部から宮城県北部の地域。
 - ③ 七郎内型や石生前型の土偶を主体とした福島県域。
- その他に、山形県庄内地方から秋田県にかけた日本海沿岸部には北陸方面の影響を受けた土偶(阿部1998)、新潟県の阿賀野川以北の地域には潰れた頭部形状で葉脈状文様を施した土偶(今井2018)が分布する。

①の地域には、西ノ前・台ノ上・谷地遺跡のように多量の土偶を保有した遺跡が存しており、集落構成では大型住居を基調とした環状集落が展開する。土器では、大木7b式において①の地域に隆帯による対弧線文や渦巻き文を縄圧痕に沿わせる文様が卓越するのに対し、③の地域では有節沈線で施文した土器が卓越し、土偶の分布状況と符合するとの指摘がある(中野2014)。日本海沿岸部には新保・新崎式土器の流入が顕著で、ヒスイ製大珠や蛇紋岩製磨製石斧の流通も本格化しており、土偶への影響も想定される。他の文化要素との整合性を検証することが求められる。

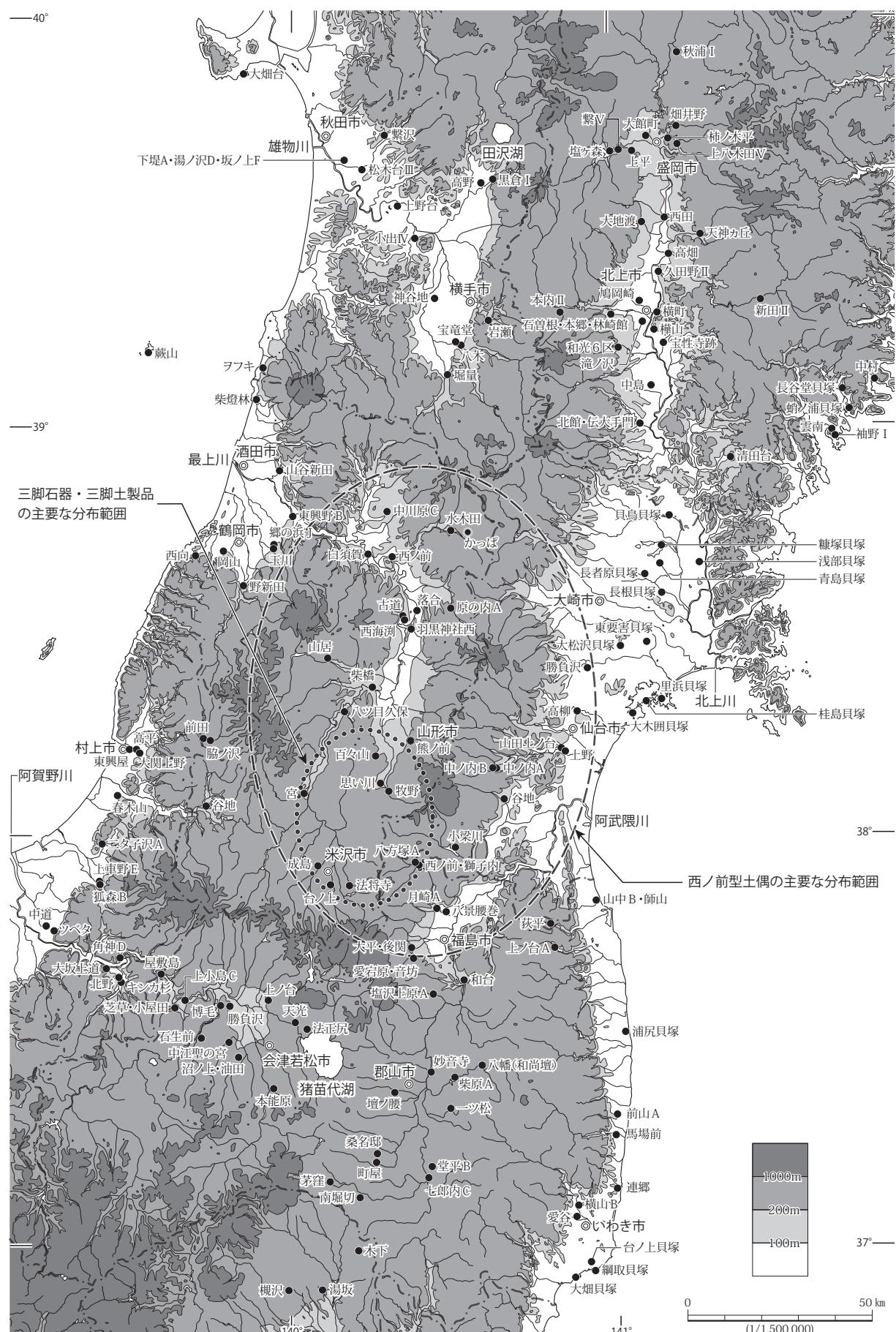


図 15 東北中部・南部の縄文時代中期前葉・中葉（大木7a～8b式期）の主要遺跡

7 結語

縄文中期の西海渕遺跡と西ノ前遺跡を中心に、精神文化の象徴として「西ノ前型土偶」を共有した山形県北東部の地域社会を概観した。

当該域では、大木7b～8b式期にかけて大型住居跡を主体とした定型的な大規模集落が形成された。特に西海渕遺跡では、墓域と貯蔵施設域、居住域が同心円状に配置され、それぞれの空間の機能が明確に区分されていた。一方西ノ前遺跡は墓域が明確でないものの、台地の縁辺に沿って住居が求心性をもって配置され、集落の北端に貯蔵施設が集中しており、空間を分割した構成が認められた。しかし大木9式期になると、前者ではその規制は崩れ、円形を基調とした住居の定型化と小型化が進行し、後者では集落自体が廃絶された。

当該域では大木8b式または同9式で集落の営みを終えた拠点集落が顕著に見られ、中期末葉大木10式まで継続した遺跡は稀である。大木8b式期頃までは地理的単元ごとの有力遺跡の配置が認められたが、大木9式期にはその原則が崩れ、規模の小さな集落が分散した居住システムへ転換した可能性が高く、この時期に画期が設定される。また山形県内では多くの遺跡が大木10式で廃絶され、後期まで継続せず、中期末にも大きな画期が存している。その背景には、気候の冷涼化に伴う食糧事情の変動が関与していたと推定されるが、最上地方に限っては、白須賀遺跡や釜淵C遺跡等の長期にわたって継続した集落が存在する。

中期前葉～中葉の拠点集落の周囲には、その分村としての小規模集落や季節的短期滞在的キャンプ等が位置しており、機能を分有した多様な遺跡間で社会紐帯が形成され、相互に補完し合う関係が成立していたと想定される。西海渕遺跡や西ノ前遺跡は定住性の高い集落であったため、石鏃等の狩猟具の出土量は少なく、磨石・凹石・石皿等の植物質食料の調理具類が多く出土している。また集落内には貯蔵施設であるフラスコ状土坑が多く構築されており、集落において植物質食料の調理・加工が活発に行われていた様相が窺われる。植物質食料に大きく依存した生業活動が、中期社会の存立基盤になっており、両遺跡は通年居住された集落であると共に、一定期間周囲の遺跡から集住し、共同作業や祭祀が執り行われてい

た可能性が指摘され、大型の建物跡はそのための施設としても利用されていたのであろう。従ってその存立基盤が揺らいだ時、集団を分散させる必要に迫られ、拠点集落の解体を促した可能性が考えられ、大木8b～9式の時期に相当する。

大木7b式土器で見た場合、小梁川遺跡（宮城県七ヶ宿町）の北方約25kmに中ノ内A遺跡（宮城県川崎町）、南方約17kmに月崎A遺跡（福島県福島市）といった同時期の比較的規模の大きな遺跡が隣接する（図2・15）。前者ではかなりの数の竹ノ下式が伴い、大きな截頭波状口縁の浅鉢形土器が顕著である。また後者では阿玉台Ia式が多く、隆起線上に縄文を施文した大木7b式の「月崎系統」（今村2010:376～377頁）が卓越する。互いに近接するものの、それぞれに異なった土器の様相が看取され、当該期は小地域毎の地域差が強まって、極めて狭い地域圏が並立した状況にあったことが指摘されおり（今村2010:371頁）、この小地域ごとの地域色の顕現は、＜安定生活・移動の少ない生活・土器分布の狭まり＞の組み合わせで理解されている（今村2010:490頁）。一方後続する大木8a式土器には、地域差が弱まって、類似性の高い土器が拡がっており、東北北部や関東にも影響を及ぼしている。

この大木7b～8a式期に、山形県内陸部（最上川中・上流域）から宮城県南部（福島盆地も一部含まれる）にかけた地域に「西ノ前型土偶」が濃密に分布しており、同土偶を保有するより広域的な情報の共有圏が形成されていた（図15）。土偶祭式に関わる集団間の共同意識を反映したと見るならば、通婚圏のような集団関係の地理的範囲を示している可能性も考えられる。他の遺物（三脚石器・三脚土製品）に着目すると、さらに小さな地域圏の抽出が可能となっており、大木式土器分布圏における地域社会の解明は、重要な研究課題となっている。大木7b式と同8a式の間でいかなる社会的変化が生じていたのか、土偶の拡がりだけでは解明できない重要な問題を内包しており、土器研究をはじめとする総合的見地からの接近が強く求められる。正確な遺跡の位置情報に基づいた本論の考察は、そのための基礎的作業をなすものである。

本論を草するに当たり、菅原哲文氏には縄文時代中期に関して様々なご教示を賜りました。また橋本裕子氏に

は図版の作成でご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 縄文中期の土器型式編年は、筆者が整理した「小梁川・大梁川編年」(小林圭一 2017b)に基づいている。なお東北地方の慣用に倣い、大木 7a 式を中期初頭、同 7b 式を中期前葉、同 8a・8b 式を中期中葉、同 9 式を中期後葉、同 10 式を中期末葉と区分した。従って大木 7b 式に対応した勝坂式を中期中葉とする関東地方の編年区分とは、隔たりが生じている。
- 2) 発掘調査報告では、「1号住居跡と2号住居跡が共に「長さ約 18 m 幅約 8 m を測る」(石井 1996: 9 頁)と記されており、それに従うと当該域では例を見ない巨大な建物跡となる。しかし報告書の第7図遺構配置図(1/600)ではその半分の数値が計測され、当該域大型住居の一般的なサイズに相当することから、報告書の記述が誤りであると判断した。
- 3) 中ノ内 A 遺跡出土の完形土偶(図 13-3)は、旧河道堆積層(4 層)から上半身と下半身が 1 m 離れた状態で出土し、大木 7a 新式の第 I 群土器に位置づけられている(相原ほか 1987: 250 頁)。旧河道堆積層出土土器については、「いずれも二次的な堆積による破片資料であり、土器の共伴関係や組み合わせは不明」(相原ほか 1987: 274 頁)と報告されており、出土状況からの積極的な裏付けは得られていない。なお同例の背面の正中線は凹線ではなく、黒色の顔料によって描出されている。
- 4) (菊地 1997) では 99 点(内 3 点接合)の土偶、(菊地 2006) では 169 点(内 1 点表採)の土偶が報告されており、両者を合わせて 268 点と算出したが、いずれも大木 7a ~ 8b 式に帰属される。

引用文献

- 相原淳一ほか 1986 『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書 II 小梁川遺跡—遺物包含層— 原頭遺跡・養源寺遺跡・大熊南遺跡』(宮城県文化財調査報告書第 117 集) 宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所
- 相原淳一ほか 1987 『中ノ内 A 遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書 II-』(宮城県文化財調査報告書第 121 集) 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 阿部明彦 1982 「第四章 縄文時代中期」『村山市史 別巻一 原始・古代編』 pp.271-398 村山市史編さん委員会・村山市
- 阿部明彦 1998 「中期大木式期の様相—西ノ前タイプ土偶の出現と展開—」『土偶研究の地平—「土偶とその情報」研究論集(2)』(「土偶とその情報」研究会編集) pp.183-202 勉誠社
- 阿部明彦ほか 1984 『水木田遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 75 集) 山形県教育委員会
- 阿部明彦・黒坂雅人 1991 『西海渕遺跡第 1 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 164 集) 山形県教育委員会(2006 年刊行)
- 阿部明彦・黒坂雅人 1992 『西海渕遺跡第 2 次発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 174 集) 山形県教育委員会(2006 年刊行)
- 阿部健太郎ほか 2007 『油田遺跡—第 2 分冊 縄文・弥生時代編—』(会津美里町文化財調査報告書第 2 集) 会津美里町教育委員会
- 阿部泰之ほか 2011 『屋敷島遺跡発掘調査報告書 II 遺物編』(阿賀町埋蔵文化財調査報告書第 2 集) 阿賀町教育委員会
- 石井由佳 1996 『分布調査報告書(5) ドザキ遺跡発掘調査報告書』(大石田町埋蔵文化財調査報告書第 8 集) 大石田町教育委員会
- 今井哲哉 2018 「新潟県域における河童形土偶の分類と分布—土偶に見る地域性への理解—」『*津南シンポジウム XIV* 馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集—』(津南学叢書第 35 輯) pp.311-319 津南町教育委員会
- 今村啓治 2010 『土器から見る縄文人の生態』 同成社
- 大友義助 1969 「第二章 郷土の石器時代」『真室川町史』 pp.14-51 真室川町史編纂委員会・真室川町
- 大友義助 1999 「第二章 石器時代の郷土」『大蔵村史 通史編』 pp.127-171 大蔵村史編さん委員会・大蔵村
- 大類 誠 1984 『中遺跡発掘調査報告書—第 2 次調査—』(尾花沢市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集) 尾花沢市教育委員会
- 柏倉亮吉・長沢正機ほか 1978 「V 神室山・加無山の考古学—神室山・加無山周辺の先史時代遺跡分布—」『神室山・加無山 総合学術調査報告書』 pp.305-343 山形県総合学術調査会
- 加藤 稔 1985 「第四章 縄文時代」『大石田町史 上巻』 pp.109-180 大石田町
- 菊地政信 1997 『台ノ上遺跡発掘調査報告書』(米沢市埋蔵文化財調査報告書第 55 集) 米沢市教育委員会
- 菊地政信 2006 『台ノ上遺跡発掘調査報告書』(米沢市埋蔵文化財調査報告書第 88 集) 米沢市教育委員会
- 黒坂雅人 1994 『西ノ前遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2012 「富並川流域における縄文時代の遺跡動態—西海渕・川口・宮の前遺跡の検討を通して—」『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 研究成果報告書 I』 pp.125-198 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林圭一 2017a 「宮城県七ヶ宿町小梁川遺跡の集落構成」『研究紀要』第 9 号 pp.19-44 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2017b 「縄文時代中期「小梁川・大梁川編年」に関する覚書」『研究紀要』16 pp.3-24 東北芸術工科大学東北文化研究センター
- 小林謙一 2017 『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素 14 年代—』 同成社
- 酒井英一 1991 「第二編 原始の羽黒」『羽黒町史 上巻』 pp.83-179 羽黒町
- 佐々木亜貴子 1995 「山形市百々山遺跡出土の土器—尚古館所蔵資料の紹介—」『山形考古』第 5 卷第 3 号(通巻 25 号) pp.1-18 山形考古学会
- 佐々木勝ほか 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書—VII—(西田遺跡)』(岩手県文化財調査報告書第 51 集) 岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局
- 佐竹桂一 2002 『中川原 C 遺跡・立泉川遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 98 集) 山形県埋蔵文化財センター
- 佐藤鎮雄ほか 1977 『主要地方道尾花沢・寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 9 集) 山形県教育委員会
- 菅原哲文 2014 「最上川中流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 6 号 pp.27-48 山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2016 「最上川上流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 8 号 pp.51-70 山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2017 「最上川中・下流域における縄文時代中期から後期の遺跡分布」『研究紀要』第 9 号 pp.45-74 山形県埋蔵文化財センター
- 菅原哲文 2018 「山形県内の中期中葉土器群の様相」『*津南シンポジウム XIV* 馬高式土器の成立・展開・終焉—予稿集—』(津南学叢書第 35 輯) pp.197-212 津南町教育委員会

鈴木雅・早瀬亮介 2015 『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2—各種開発事業に伴う遺構確認調査・小規模開発事業に伴う緊急調査(平成 25 年度)一附編 1 消防庁舎建設設計画に伴う谷地遺跡発掘調査概報(平成 23・24 年度調査)・附編 2 谷地遺跡における放射性炭素年代(AMS 測定)』(蔵王町文化財調査報告書第 20 集) 蔵王町教育委員会

谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社

長沢正機ほか 1986 『本町遺跡発掘調査報告書』金山町教育委員会

中野幸大 2008 「東北地方南部地域における縄文中期初頭から中葉の土偶」『第 5 回 土偶研究会 宮城県大会資料』 pp.11-29 土偶研究会

中野幸大 2014 「調査研究コラム # 013 東北南部における中期中葉の土偶—福島県内を中心として—」『公益財団法人福島県文化振興財団遺跡調査ホームページ』〈<http://www.iseki.fcp.or.jp/A05/f13.html>〉(2018/11/19 アクセス)

名和達朗・阿部明彦 1981 『熊の前・来迎寺遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 34 集) 山形県教育委員会

名和達朗・渋谷孝雄 1983 『中村 A 遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 73 集) 山形県教育委員会

福島県教育委員会編 1975 『東北自動車道遺跡調査報告 本文編・図版編』(福島県文化財調査報告書第 47 集) 福島県教育委員会・日本道路公団

藤沼邦彦 1992 「宮城県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 37 集(特集 土偶とその情報) pp.112-135 国立歴史民俗博物館

松本茂ほか 1991 『東北横断自動車道遺跡調査報告 11—法正尻遺跡—』(福島県文化財調査報告書第 243 集) 福島県教育委員会・福島県文化センター

水戸部秀樹ほか 2006 『小反遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 148 集) 山形県埋蔵文化財センター

山内幹夫 1992 「福島県の土偶」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 37 集(特集 土偶とその情報) pp.154-174 国立歴史民俗博物館

山口博之・渡辺薰 1996 『落合遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 36 集) 山形県埋蔵文化財センター

山形県教育委員会編 1988 『原の内 A 遺跡第 3 次発掘調査報告

書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第 132 集) 山形県教育委員会

図版出典

図 1・5・10: 国土地理院発行『1:50,000 地形図 大沢・羽前金山・秋ノ宮・清川・新庄・鳴子・月山・尾花沢・薬萊山』をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 大沢／湯沢・羽前金山・秋ノ宮／清川／新庄／鳴子・薬萊山／月山／尾花沢』を参照して作成した。

図 2: 国土地理院発行『数値地図 50000 (地図画像) 宮城・山形』をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 遊佐・鳥海山／酒田／大沢／湯沢・羽前金山・秋ノ宮／三瀬・温海・鶴岡／清川／新庄／鳴子・薬萊山／湯殿山／月山／尾花沢／勝木・大鳥池／左沢／楯岡／関山峠・川崎／塩野町・朝日岳／荒砥／山形／小国・手ノ子／赤湯・上山／飯豊山・大日岳／玉庭・熱塩／米沢・関／吾妻山・福島』を参照して作成した。

図 3: (小林圭一 2012: 図 3) を転載

図 4: (小林圭一 2012: 図 7) を転載

図 6: (小林圭一 2012: 図 22) を転載

図 7・8: (小林圭一 2012: 図 23・24) を転載

図 9: 国土地理院発行『電子地形図 25000 (DVD 版) 一山形県 -』(2017 年 11 月 24 日作成) をベースに、山形県発行『土地分類基本調査 1:50,000 地形分類図 左沢／楯岡／関山峠・川崎／荒砥／山形』を参照して作成した。

図 11: (小林圭一 2012: 図 26) を転載

図 12: (黒坂 1994: 図 65・66) をトレース

図 13-1・2: (相原ほか 1987)、3~8: (相原ほか 1986)、9: (阿部ほか 1984)、10・11・13・14・16・17: (黒坂 1994)、12: (柏倉ほか 1978)、15・20: (菊地 2006)、18・19・21: (山形県教委編 1988)、22: (阿部・黒坂 1991)

図 14-23・24・30・37: (阿部ほか 1984)、25・26: (山形県教委編 1988)、27・35: (黒坂 1994)、28: (菊地 2006)、29: (山口・渡辺 1996)、31・33・34・36: (佐竹 2002)、32・38: (菊地 1997)、39~45: (阿部・黒坂 1991)、46: (佐々木ほか 1980)、47: (福島県教委編 1975)、48・51: (阿部ほか 2007)、49: (松本ほか 1991)、50: (阿部ほか 2011)

図 15: 国土地理院発行(1996 年 3 月)「1:500,000 地方図(3) 東北」をベースに作成した。